

平成26年度ユネスコスクール(ASPNet)アンケート ポイント

➤ 目的

ASPNet 加盟校の教育実践や現場の実態、問題点を継続的に把握することにより、ASPNet の活動の更なる改善、充実を図るものとする。

➤ 調査対象

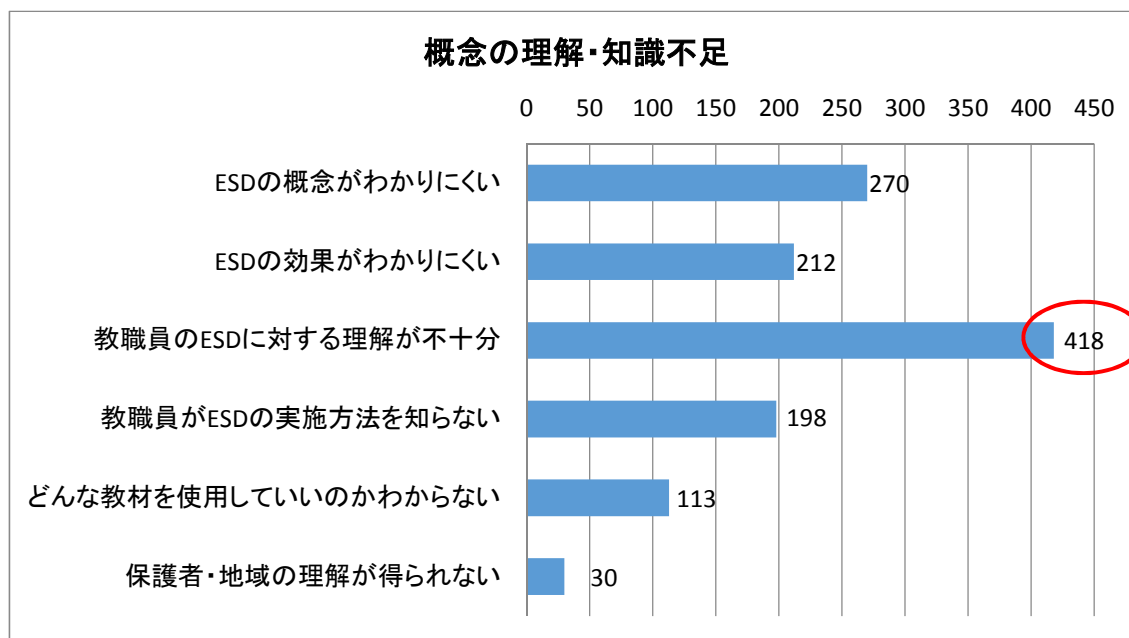
国内の ASPNet 加盟校 807 校

➤ 回答状況

回答率: 68.6% (回答数: 554 校)

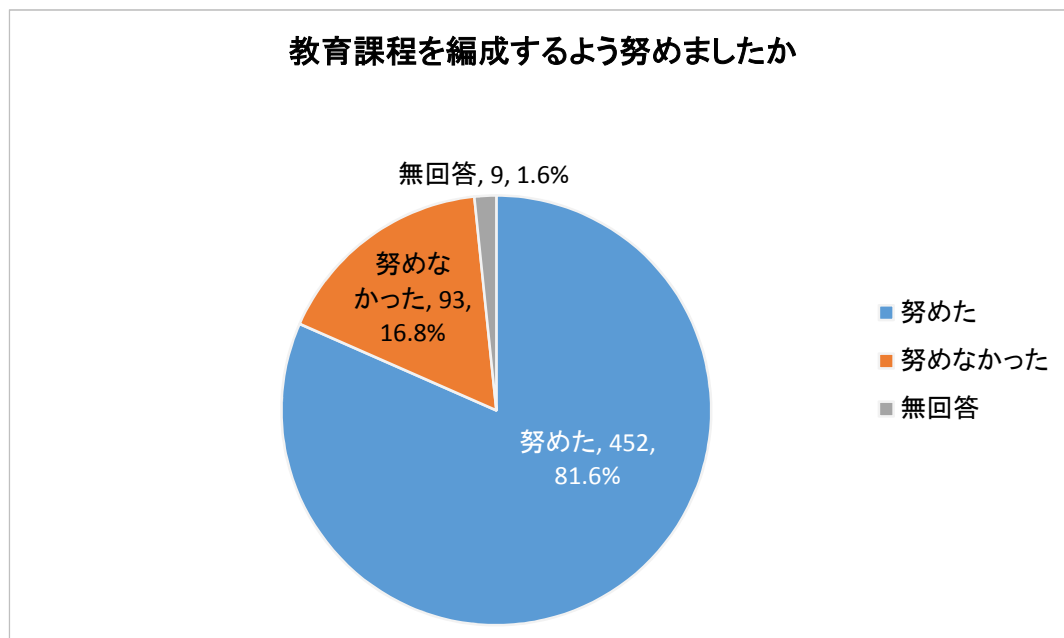
<ポイント>

- 平成 26 年 11 月に開催された ESD ユネスコ世界会議について「あいち・なごや宣言」を知っていると回答したユネスコスクールは 81%、ユネスコスクール世界大会で採択された「ESD 推進のためのユネスコスクール宣言(ユネスコスクール岡山宣言)」を知っていると回答したユネスコスクールは 87.9%となった。
- 学校教育における ESD の普及が十分に進まない理由として、「教職員の ESD に関する理解が不十分」を挙げたユネスコスクールは 75%となった。

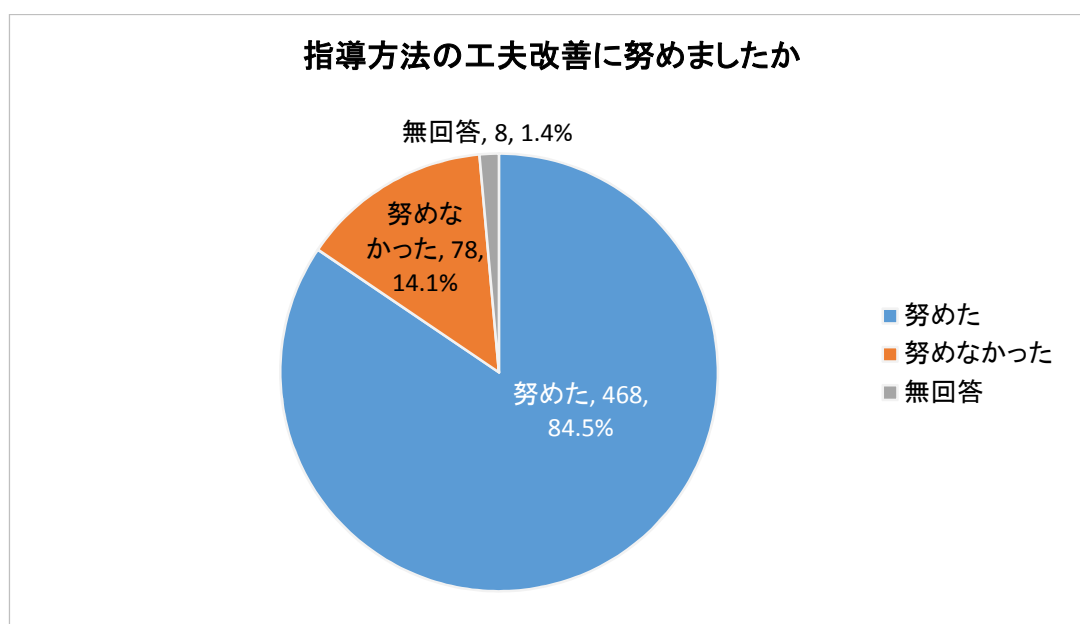


(複数選択可)

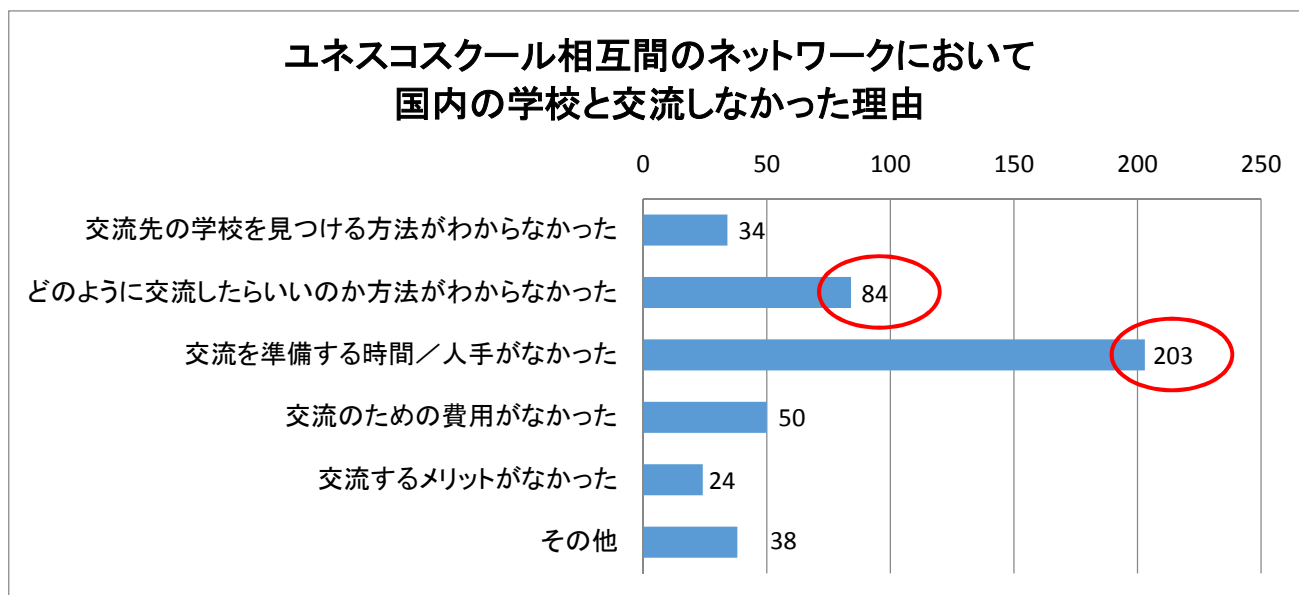
- ESDを通じて育てたい資質や能力を明確にし、自分で、あるいは協働して、問題を見出し、解決を図っていく学習の過程を重視した教育課程を編成するように努めたと回答したユネスコスクールは **81.6%**となった。



- 総合的な学習の時間を中心とした教科横断的な指導計画を立てるなど、指導内容を適切に定め、さらに、指導方法の工夫改善に努めたと回答したユネスコスクールは **84.5%**を占めた。

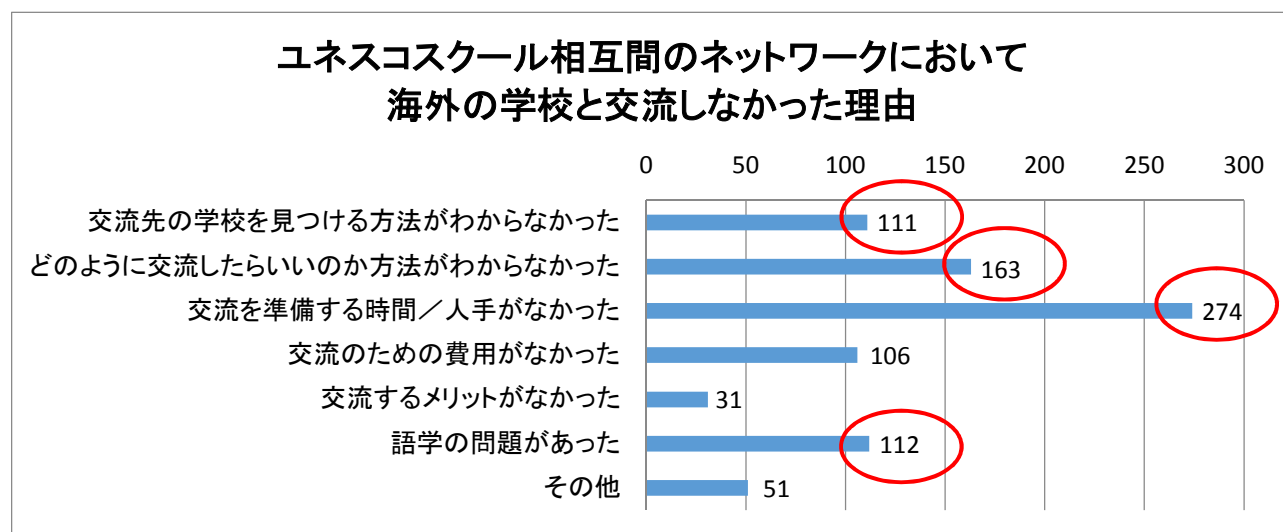


- ユネスコスクール相互間のネットワークにおいて**国内の学校**と交流しなかった理由として、「交流を準備する時間／人手がなかった」と回答したユネスコスクールは **37%**となり、「どのように交流したらいいのか方法がわからなかった」と回答したユネスコスクールは **15%**となった。



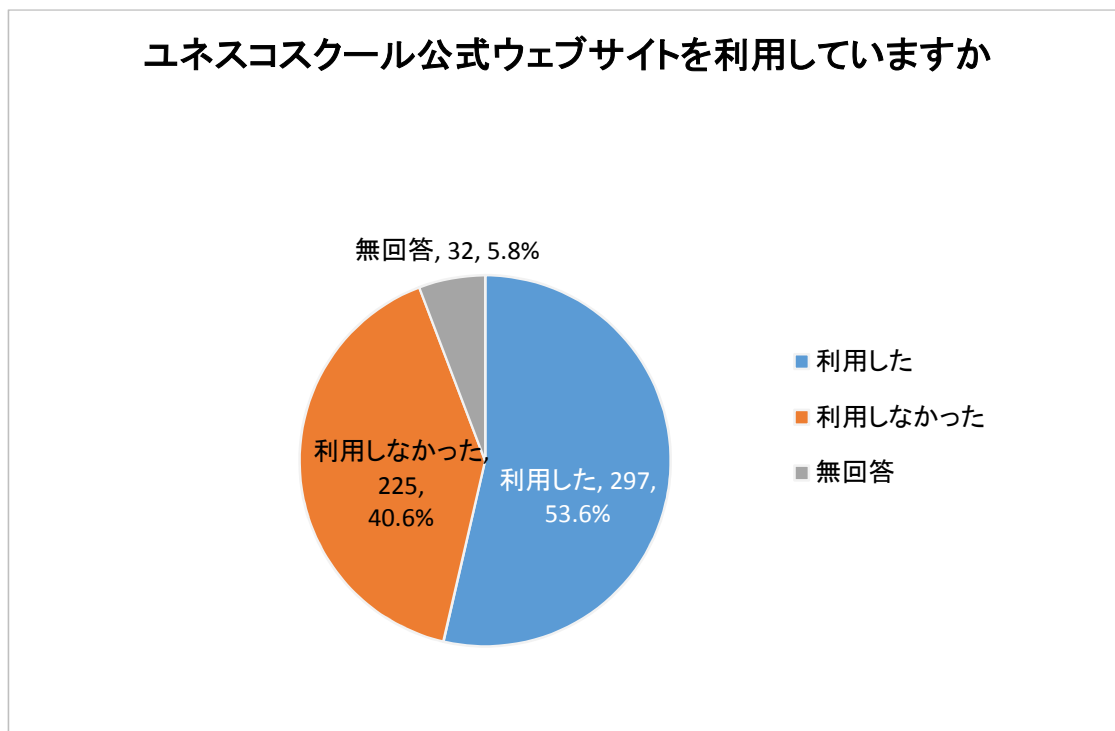
(複数選択可)

- ユネスコスクール相互間のネットワークにおいて**海外の学校**と交流しなかった理由として、「交流を準備する時間／人手がなかった」と回答したユネスコスクールは **49%**となり、「どのように交流したらいいのか方法がわからなかった」と回答したユネスコスクールは **29%**となった。また、「交流先の学校を見つける方法がわからなかった」と回答したユネスコスクールは **20%**となり、「語学の問題があった」と回答したユネスコスクールも **20%**となった。



(複数選択可)

- ユネスコスクール公式ウェブサイトを利用したと回答したユネスコスクールは **53.6%**であった。





日本ユネスコ国内委員会

Japanese National Commission for UNESCO



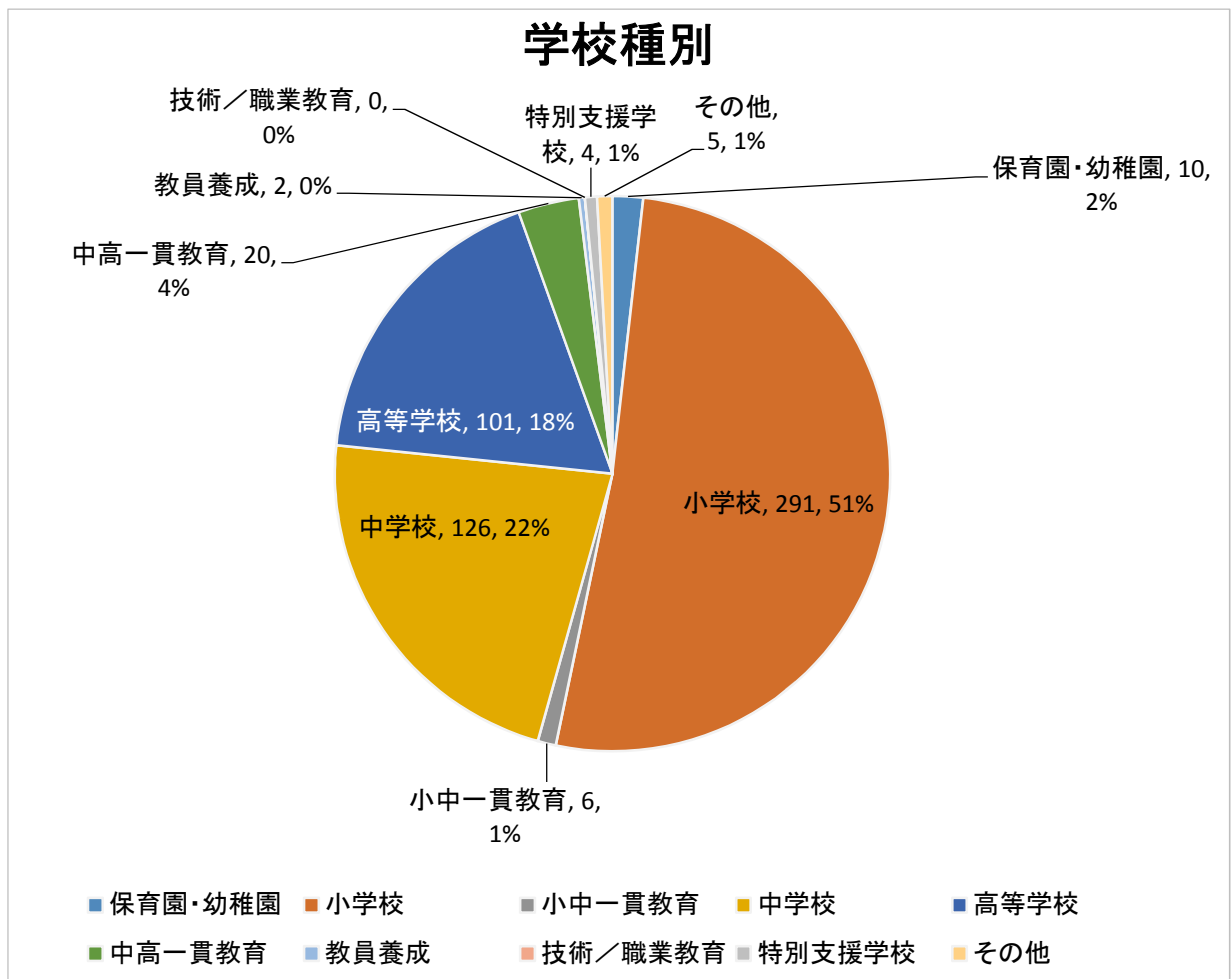
平成26年度ユネスコスクール(ASPNet)アンケート

アンケートの概要

1. 目的 ASPNet 加盟校の教育実践や現場の実態、問題点を継続的に把握することにより、ASPNet の活動の更なる改善、充実を図るものとする。
2. 調査対象 国内の ASPNet 加盟校 807 校
3. 調査方法 対象校へ電子メールにてアンケートと活動報告書を送付。電子メール、FAX、郵送にて回収。
4. 調査期間 平成 27 年 2 月 9 日～3 月 27 日
5. 回答状況
 - 発送数： 807 校
 - 回答数： 554 校
 - 回答率： 68.6%

学校種別

- ☐ 保育園・幼稚園
- ☐ 小学校
- ☐ 小中一貫教育
- ☐ 中学校
- ☐ 高等学校
- ☐ 中等高等学校
- ☐ 教員養成
- ☐ その他
- ・大学、小中高一貫教育、認可外保育施設

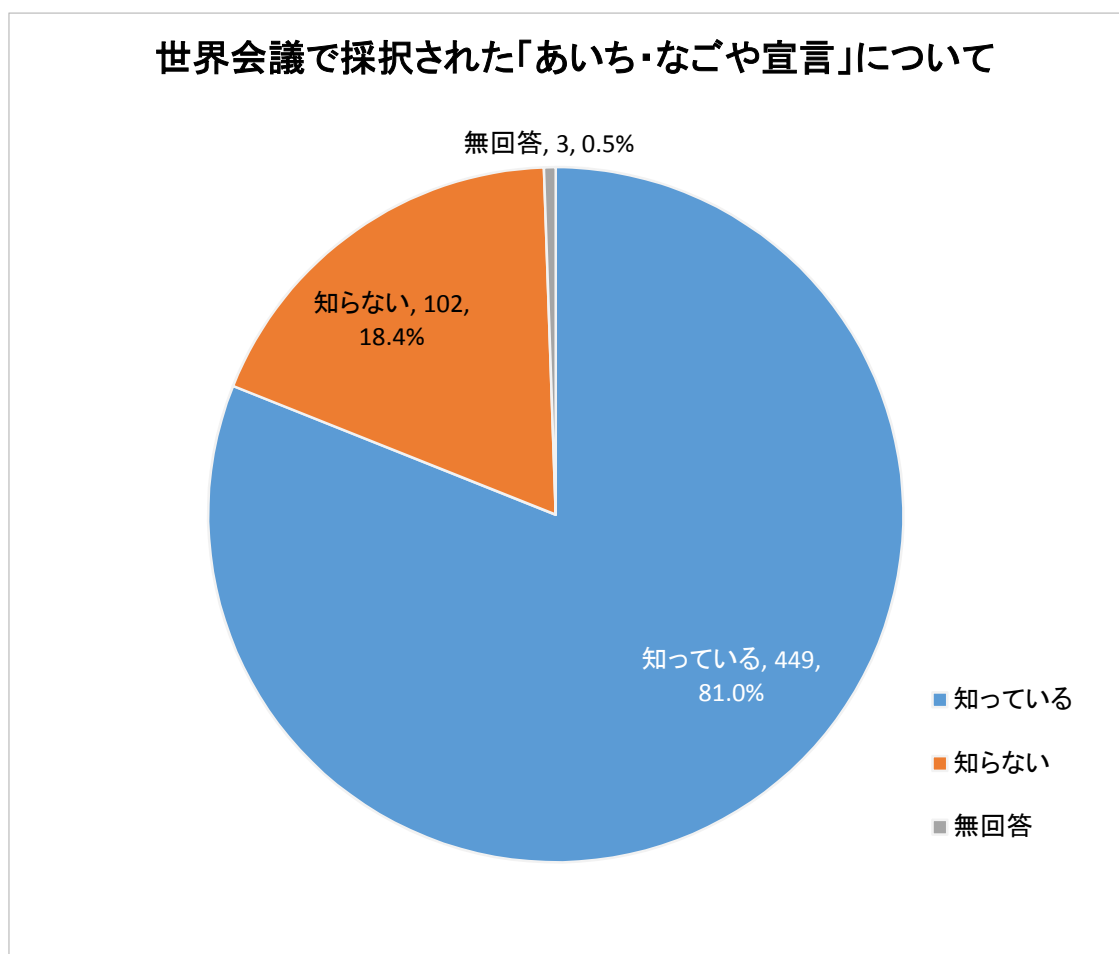


ESD ユネスコ世界会議について

1. 世界会議で採択された「あいち・なごや宣言」について

☐ 知っている

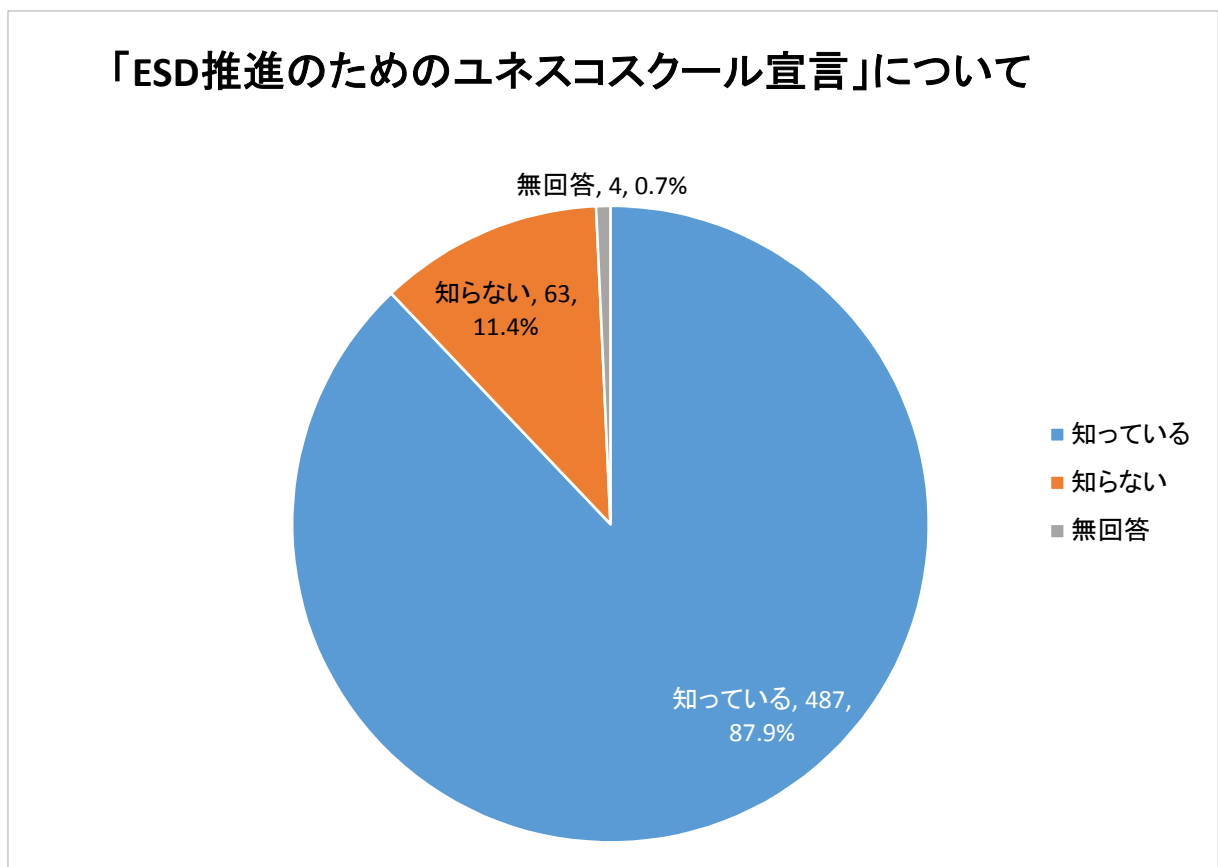
☐ 知らない



2. ユネスコスクール世界大会-第6回ユネスコスクール全国大会-で採択された「ESD 推進のためのユネスコスクール宣言(ユネスコスクール岡山宣言)」について

☐知っている

☐知らない



3. 1及び2の宣言を受けて、貴校では今後どのような活動に取り組む予定ですか

<内容>

- ・環境教育、自然教育、エネルギー環境教育、生物多様性に関する学習
- ・国際理解教育・国際交流を中心とした活動を推進
- ・福祉教育
- ・消費者教育
- ・キャリア教育、職業体験
- ・食育
- ・世界遺産学習
- ・平和・人権教育
- ・防災教育
- ・海洋教育
- ・郷土の伝統や文化等を含めた地域学習
- ・ボランティア学習
- ・教科横断的・多面的・総合的に考えることができる力を育む教育
- ・つながりを尊重しながら協同的に行う問題解決力を育む教育
- ・コミュニケーション能力を育む教育
- ・主体的、創造的な学びの充実
- ・批判的思考力を育む教育

<方法>

- ・地域社会への参画・貢献活動(PTA、地域のユネスコ協会、自治体や NPO 法人等と協力等)
- ・他のユネスコスクールとの交流
- ・ESD に関する講演会や学習発表会、校内研究授業、ワークショップの開催
- ・大学等が実施しているコンソーシアムとの連携、協力
- ・教材教科の研究
- ・教員研修
- ・学校で行っている ESD への取組をポスター掲示やホームページなどで発信
- ・ESD カレンダー、教育計画の見直し、充実
- ・スーパーグローバルハイスクール事業、スーパーサイエンスハイスクール事業との連携
- ・各クラスにユネスコ係を設け、活動の充実を図る

<その他>

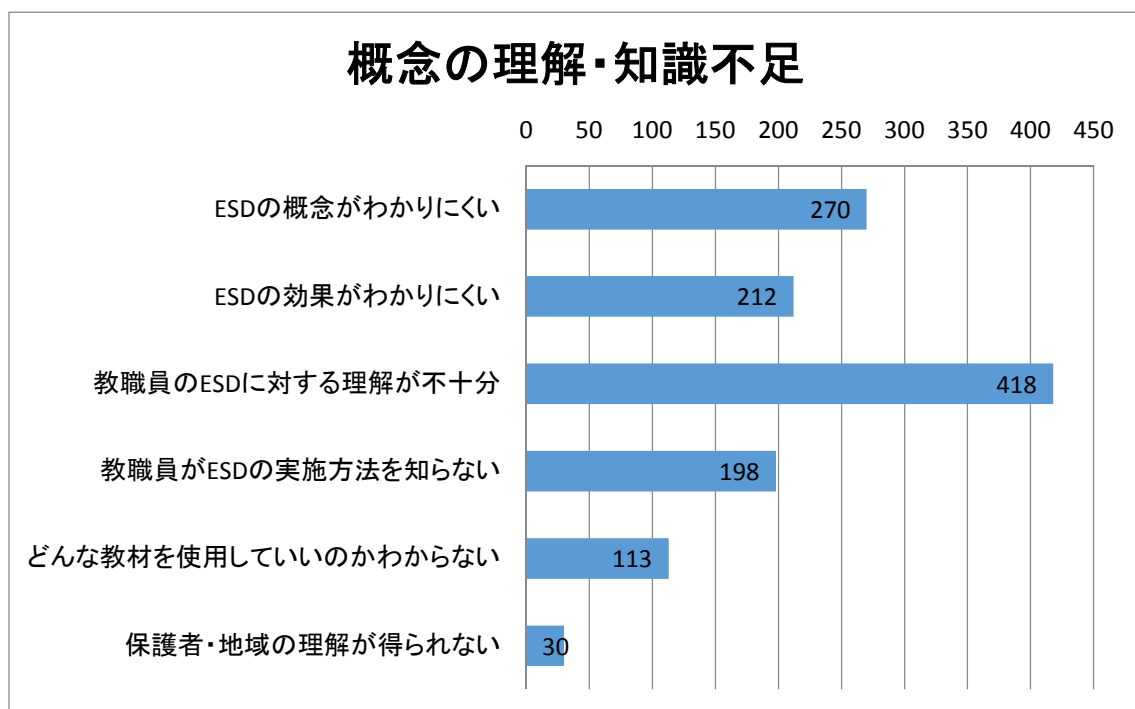
- ・これまで実施してきた内容を継続していく
- ・総合的な学習の時間を有効に活用
- ・内容を全職員・生徒で共有できていないので共通理解から始める

ESD の普及について

4. ユネスコスクールが ESD の推進拠点となり、ユネスコスクールの数も増えてきていますが、ユネスコスクール以外の学校への ESD が普及は十分とはいえない現状があります。学校教育における ESD の普及が十分に進まない理由として考えられるものを選択してください(複数選択可)。

【概念の理解・知識不足】

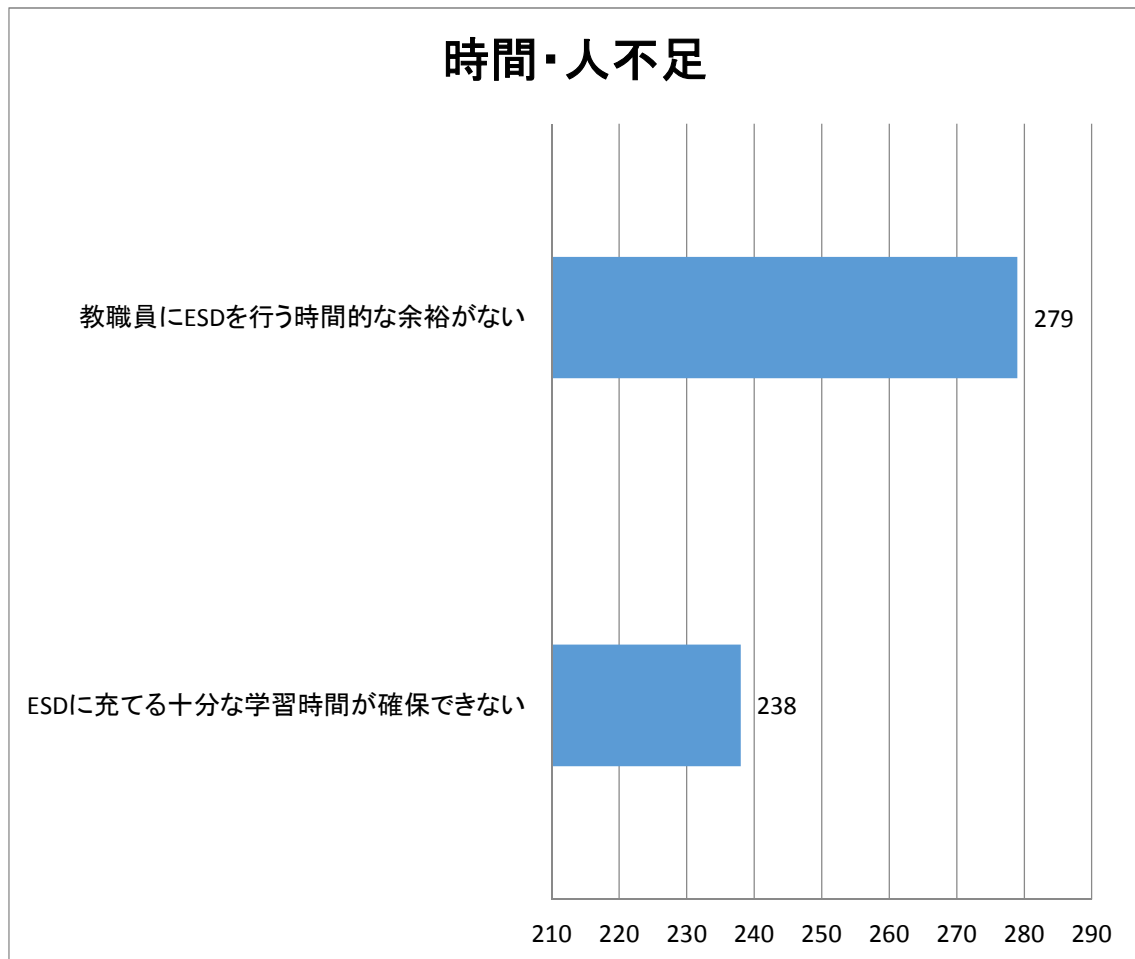
- ☐ ESD の概念がわかりにくい。
- ☐ ESD の効果がわかりにくい。
- ☐ 教職員の ESD に対する理解が不十分。
- ☐ 教職員が ESD の実施方法を知らない。
- ☐ どんな教材を使用していいのかわからない。
- ☐ 保護者・地域の理解が得られない。



【時間・人不足】

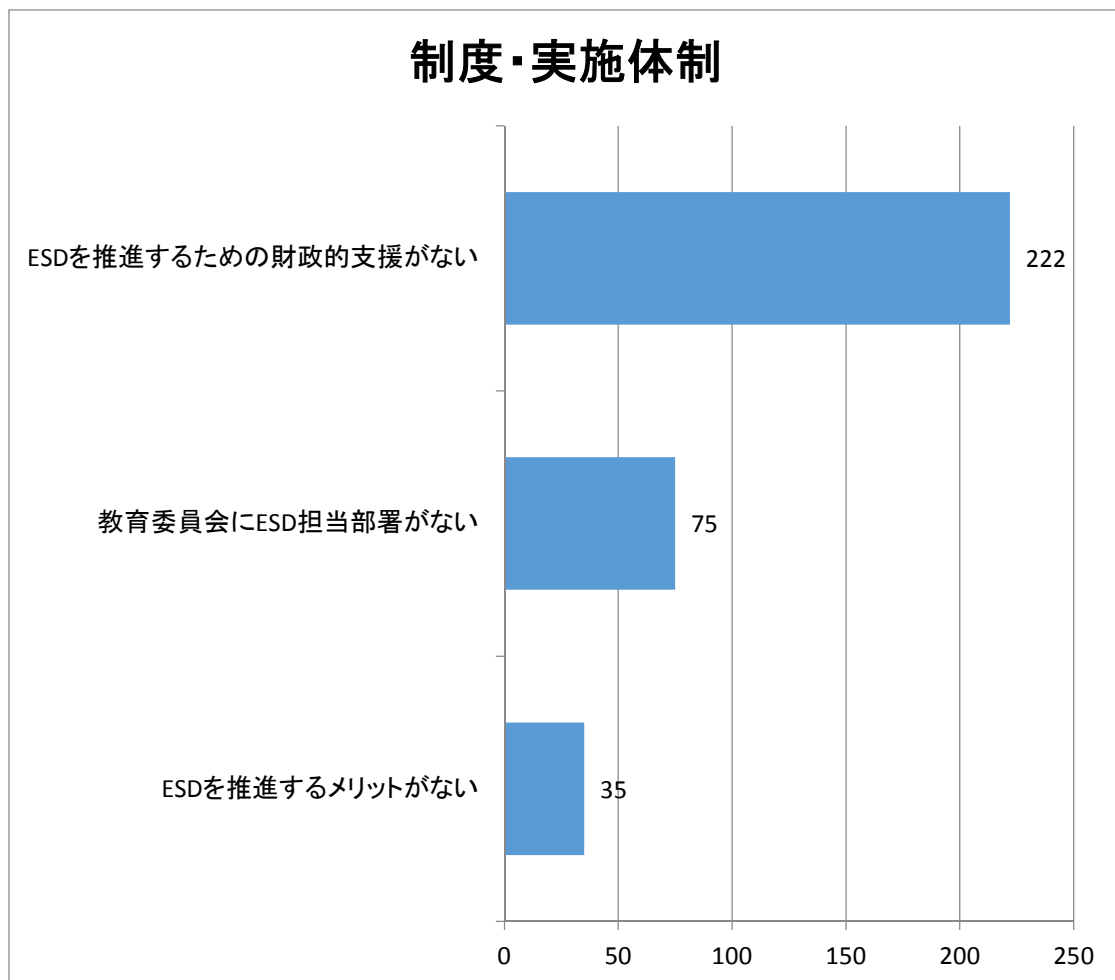
☐ ESD に充てる十分な学習時間が確保できない。

☐ 教職員に ESD を行う時間的な余裕がない。



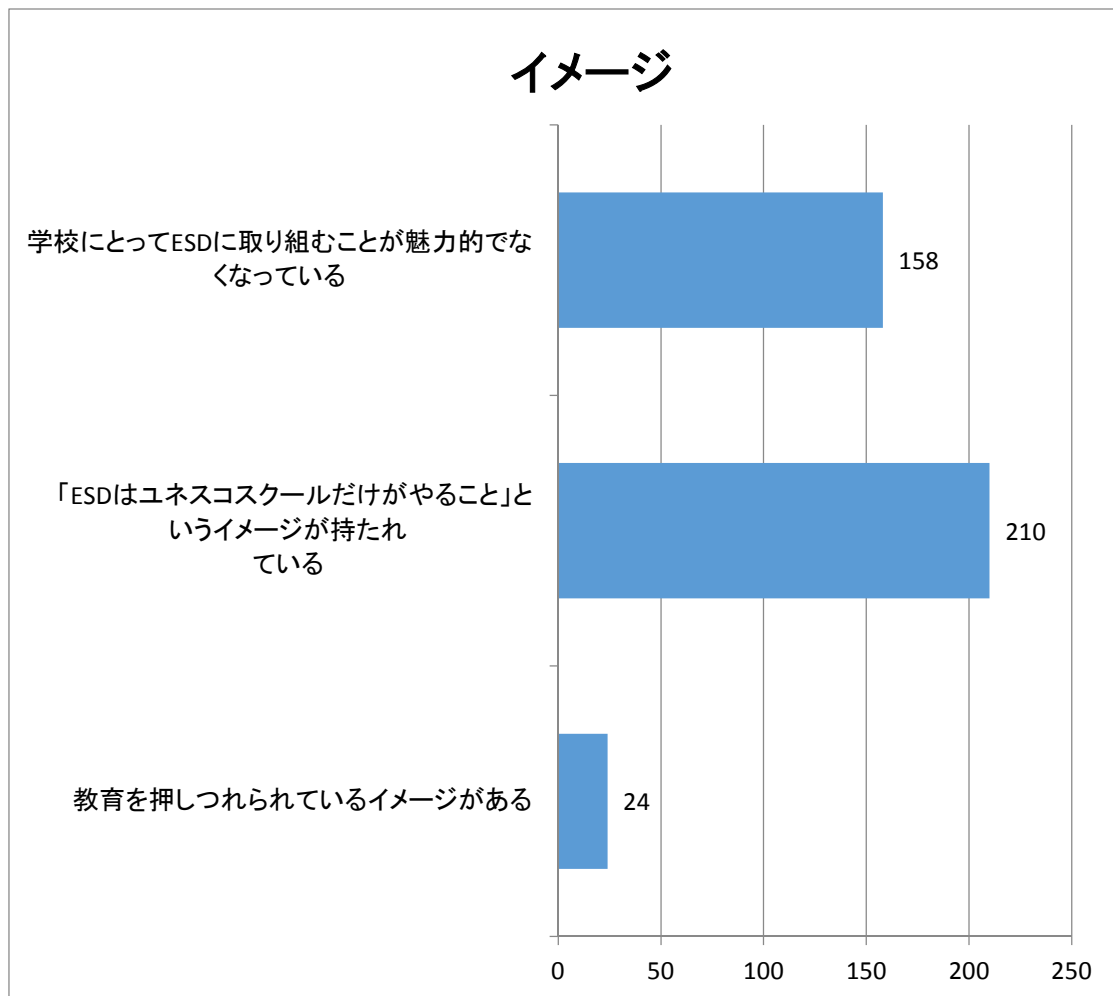
【制度・実施体制】

- ☐ ESD を推進するメリットがない。
- ☐ 教育委員会に ESD 担当部署がない。
- ☐ ESD を推進するための財政的支援がない。



【イメージ】

- 文部科学省から定型の教育を押しつれられているイメージがある。
- ユネスコスクールを ESD の推進拠点と位置付けたことによって、「ESD はユネスコスクールだけがやること」という誤ったイメージが持たれている。
- ESD の概念が広く、何でも包含してしまうため、学校にとって ESD に取り組むことが魅力的でなくなっている。



【その他】

- ・ ESD という言葉がまだ一般的に浸透していない
- ・ ESD の概念が広く、何でも包含してしまうため、通常の学習と ESD の学習の違いが明確にできない
- ・ 教育活動上のメリットが十分理解・共有されていない
- ・ ESD の考え方で進んでいる材料は学校教育にいくらでもあるのに、それを体系的、組織的に進める主体となる人、時間、財源、行政的支援等がない。
- ・ 教育現場に拘束力なしに情報としてだけ共有されるので、どうしてもトップダウン・スタイルになりがち
- ・ ESD の活動については、発表を求められることが多く、活動を始めた時期では、発表する段階にまで至っていないにも関わらず、それが負担になることがある。その状況を他の教員が見ていれば、ESD に関わりたくないと思う教員も出てくるのではないかと
- ・ 各地のユネスコ協会が無関心

5. 今後 ESD を更に普及させるための御意見

＜広報・啓発等＞

- ・ 「ESD」の理念、教育的効果がわかりづらい。
- ・ ESD の取組によって、効果が上がったことを広く宣伝し、ESD の良さを浸透させていくことが必要
- ・ 各学校が行っている活動がそのまま ESD につながっていることを啓発していく必要がある。どの学校でも校内において特色ある活動を行っており、それが ESD のどの分野に関連しているかが分かれば、これまで以上に普及が進むと考える。

＜研修、交流等＞

- ・ ESD に対する職員の理解向上のために職員向けの研修会の開催と取組計画や協議の時間の確保
- ・ 積極的に地域や多くの団体と意見交換を行う。学校・教員だけのアイデアや努力では限界がある。地域との話し合いにより、その地域の持続可能な地域社会のために、学校の役割を地域社会全体で考える場を設ける必要がある。
- ・ 国際ネットワークが脆弱なので仲介役が必要
- ・ 説明を聞くだけの受け身なものでなく、教員が ESD を実感できる研修を行う。
- ・ ユネスコスクールの枠を超えた学際的な ESD セミナー等を全国的に開催していくことが求められる。ESD をテーマにしたユネスコスクールと地域のユネスコ協会との共同企画による実践学習のイベント等は関係者の関心と意欲があれば十分実現可能であり、ESD 地域コンソーシアムの構築に向けてもよいシナジー効果が期待できると思われる。

＜教育課程、教材等＞

- ・ 学習指導要領の指導内容に明確に位置づけることが大切であり、その指導教材の充実が必要と考える。
- ・ 小学生にもわかりやすい ESD の日常生活への取り入れ方ハンドブックのようなものがあると、それがモデルとなって取り組みやすくなるように思える。
- ・ 教職員が普段の教育活動に ESD を取り入れることができるよう、より優しくわかりやすい説明や、ワークシート、指導案例などがあるとありがたい。
- ・ 受験のことを考えると知識を教え込むだけでも時間が足りない。授業で扱うべき項目を減らさない限り難しいのではないか。
- ・ 大学の教職科目等のなかで ESD を積極的に発信する。
- ・ 各都道府県や政令指定都市教育委員会が作成する教育課程編成の手引等に ESD の実践を掲載したり、同じく主催する教育課程研究協議会等に ESD 部会を設置したりする。

＜ユネスコスクール＞

- ・ ユネスコスクールへの加盟を教育委員会や市町自治体を中心となって推進する。
- ・ ESD の意義や取り組むことによる効果について、ユネスコスクール以外の学校へ知らせていくことが大切
- ・ ユネスコスクールというグループができることで、情報交換や交流がしやすくなるが、登録後、以前からの取組自体に大きな違いが生まれない場合、ユネスコスクールに登録されることのメリットが見えづらく理解もされにくい。

＜人材、組織等＞

- ・ ESD に取り組むための時間や財源が限られている。また、ESD 推進担当として、校内に新たに担当者を1名配置するなどの ESD を推進していくための具体的な方策が必要と考える。
- ・ ユースをキーとなるステークホルダーに巻き込むには、地域社会に核となる人が存在するように、学校現場にも分掌に位置づけられた ESD の核となる人材が一人いることで、広まっていくのではないか。
- ・ ESD に取り組む教職員をサポートするコーディネーター等の人材の育成や学校教育現場への派遣を望む。
- ・ 教職員の仕事量が多すぎるため ESD に関わるゆとりがないことが大きな要因になっている
- ・ 市教育委員会において担当部署を設ける。

<経費支援>

- ・ 年次報告書を提出すれば一律に少額でも研修や活動に必要な費用などをいただけるなどのメリットがあると良い。
- ・ 各地のユネスコ協会の資金面でのバックアップも今以上に必要だと思う。
- ・ ESD が社会的に今より認知されるようになり、企業等でスポンサー協力していただけるように各自治体が働きかけ、経済的支援が受けやすくなることを希望する。
- ・ 現在も企業の支援のもとに ESD アシストなどが組織されているが、途上国などとの交流活動を組織すると、相手校が日本へ来る費用などが不足して、実施が困難である。ESD の本当の意味は、「豊かさ」の本当の意味を考えることにあると思うが、その意味でも途上国との交流は重要なので、外国政府を通じた途上国のユネスコスクールへの組織的な支援が必要。
- ・ 各地域のユネスコスクールが協働して活動を行う際に、活動のための経費が学校負担となってしまう。各地域にある ASPnet 等の組織に対して、活動経費の支援があればよいが、その活用方法の検討や経費管理等の問題が生じる。
- ・ 学校間交流を開始し促進するためには、教員の交流が不可欠であるが、その旅費に苦労している。支援してもらえると、交流が進むと思われる。

<その他>

- ・ 各学校がこれまでに取り組んできた総合的な学習や生活科の学習に、ESD の概念を膨らませていく方法で進めていくことで、各学校の特徴や良さを無理なく生かせると思う。
- ・ すべてを包含することの理念や実践の大切さも踏まえつつ、その活動の中で焦点化を図る。活動の共有化が図られやすくなることで、各学校の取組が活性化されるのではないかと考える。
- ・ 自分たちの学校のテーマ等にあった ESD の事例がたくさんあれば、共通性を探り、機能的に学習のイメージがつかめそうである。
- ・ 地元の民間ユネスコ協会にも協力をいただき、ESD パスポートという新しいツールを活用することで、連携強化が図られ、ESD の普及につながっていくと考える。
- ・ ESD の主旨や考え方には賛同している教職員も多いが、今は、職員の意識が能動的に働いていないため、発表や報告を依頼されても負担と感じているのが正直なところ。加盟することで目に見えるメリットがあればと思う。
- ・ 学校教育だけでなく、社会教育の場でも取り組むことができればと考える。
- ・ 多くのボランティア活動、団体を巻き込みながら、具体的な方策を打ち出すべき。
- ・ ESD の理念を取り入れることで学校にとって現場の教育活動と成果の見取りが容易になり仕事が整理されるなどのメリットがあることを明確にできればよいのではないかと。

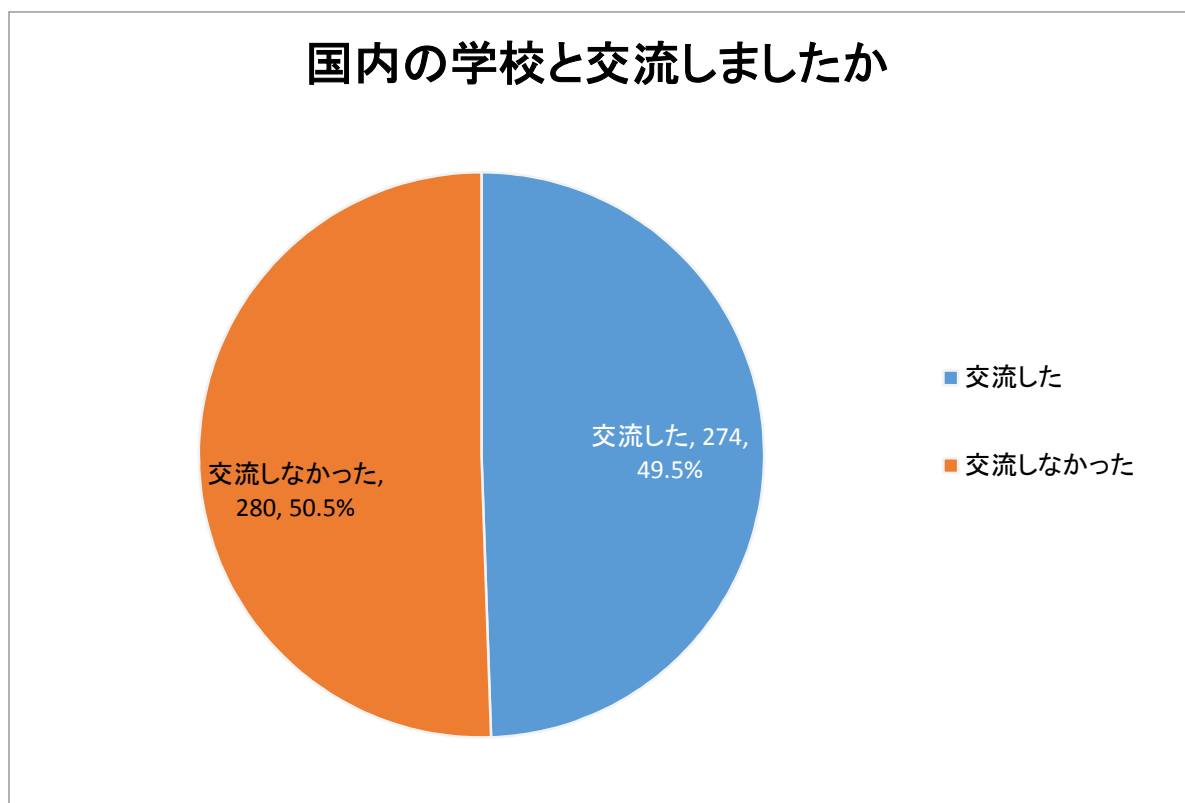
本年度のユネスコスクール活動

6. ユネスコスクール相互間のネットワークについて

(1)どのように国内の学校と交流しましたか。

☐交流した

☐交流しなかった



交流した場合、以下の内容から選択ください(複数回答可)

☐ 教員の往来

☐ 生徒・児童の往来

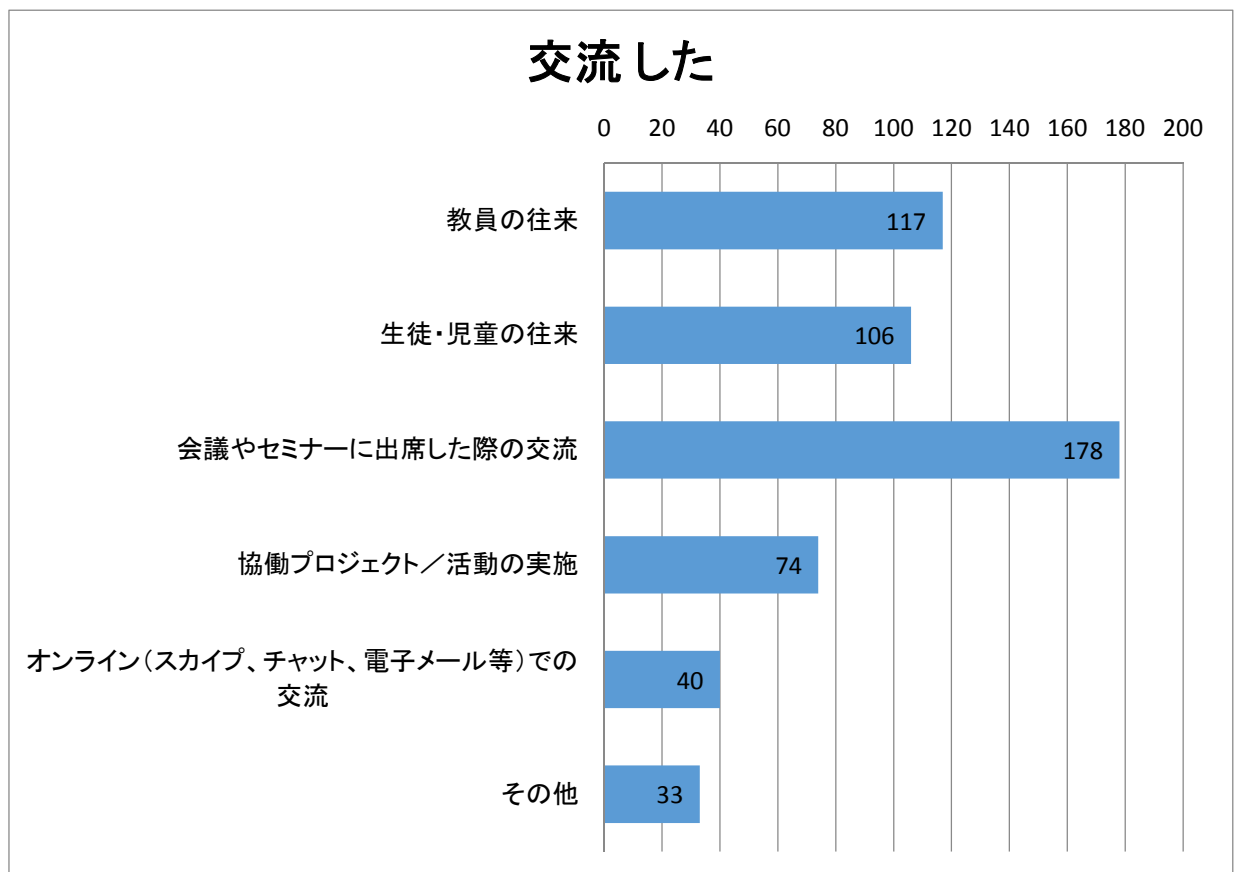
☐ 会議やセミナーに出席した際の交流

☐ 協働プロジェクト／活動の実施

☐ オンライン(スカイプ、チャット、電子メール等)での交流

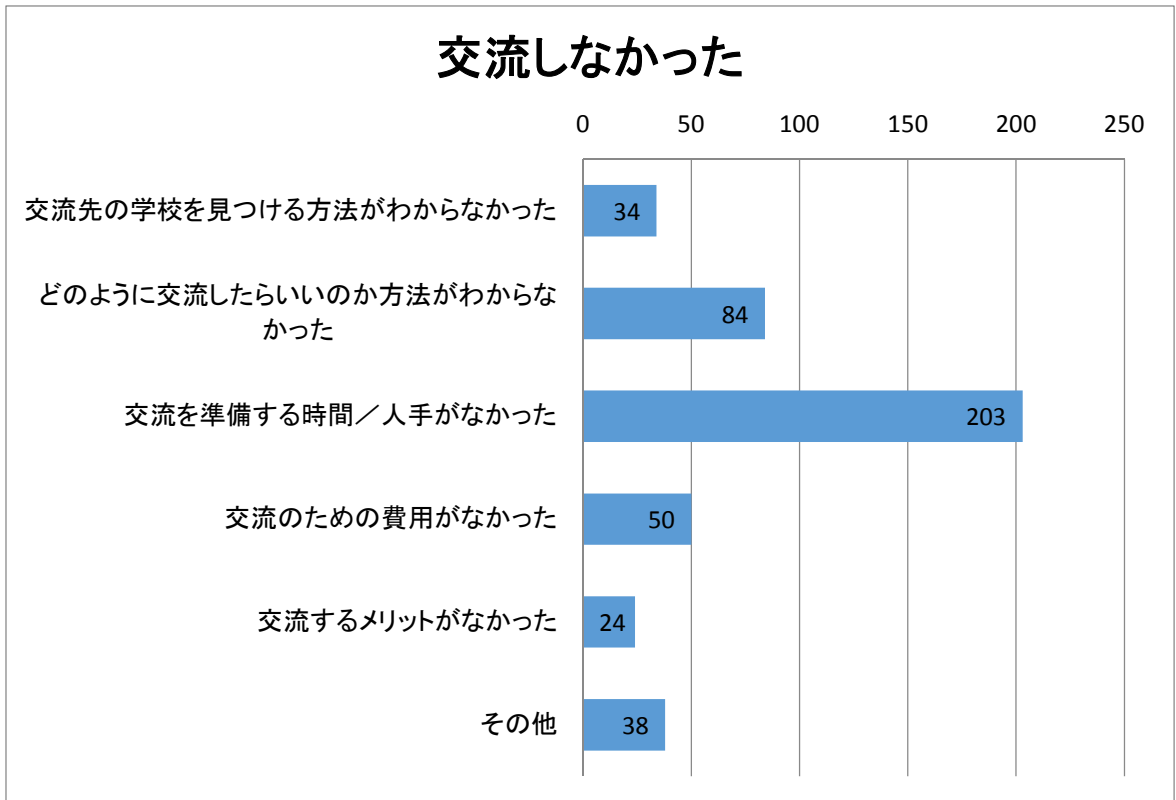
☐ その他(自由記述)

- ・ レポート交流
- ・ 作品交流
- ・ 高校生フォーラム世界大会の運営スタッフとして参加



交流しなかった場合、以下の内容から選択ください(複数選択可)。

- ☐ 交流先の学校を見つける方法がわからなかった
- ☐ どのように交流したらいいのか方法がわからなかった
- ☐ 交流を準備する時間／人手がなかった
- ☐ 交流のための費用がなかった
- ☐ 交流するメリットがなかった
- ☐ その他(自由記述)

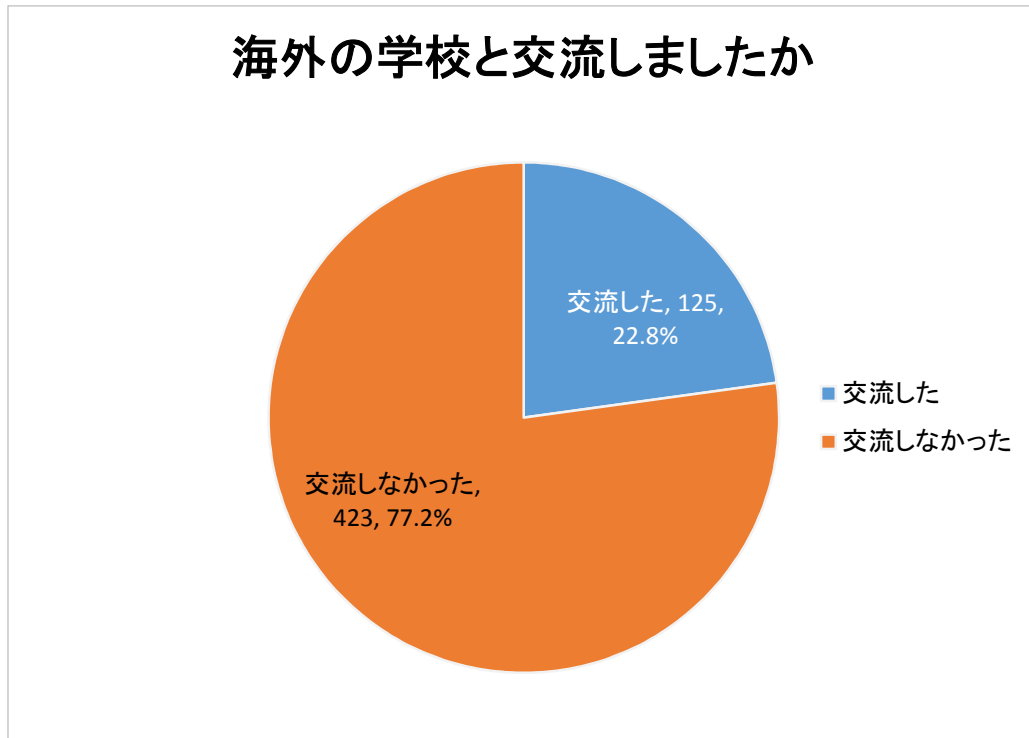


- ・ 大学の留学生と交流会を実施したため
- ・ 主に民間組織の人と活動や意見交換を実施
- ・ ユネスコスクールではないが、他県の小学校と交流があったから
- ・ 校内の ESD へ取組が交流まで至っていない。
- ・ 交流する学校が近くにいる
- ・ 海外との交流を軸に学校として取り組んでいる為
- ・ ユネスコスクール以外の学校と交流した
- ・ 現在の活動内容で手一杯であり、また必要性を感じないため
- ・ 活動内容に他校との交流を含んでいない
- ・ 人員確保ができないため
- ・ 与えられた時間の中で交流まで広げることが難しかった
- ・ 現在の学習では交流する内容は盛り込まれていなかった

(2) 海外の学校と交流しましたか。

☐ 交流した

☐ 交流しなかった



交流した場合、以下の内容から選択ください(複数回答可)

☐ 教員の往来

☐ 生徒・児童の往来

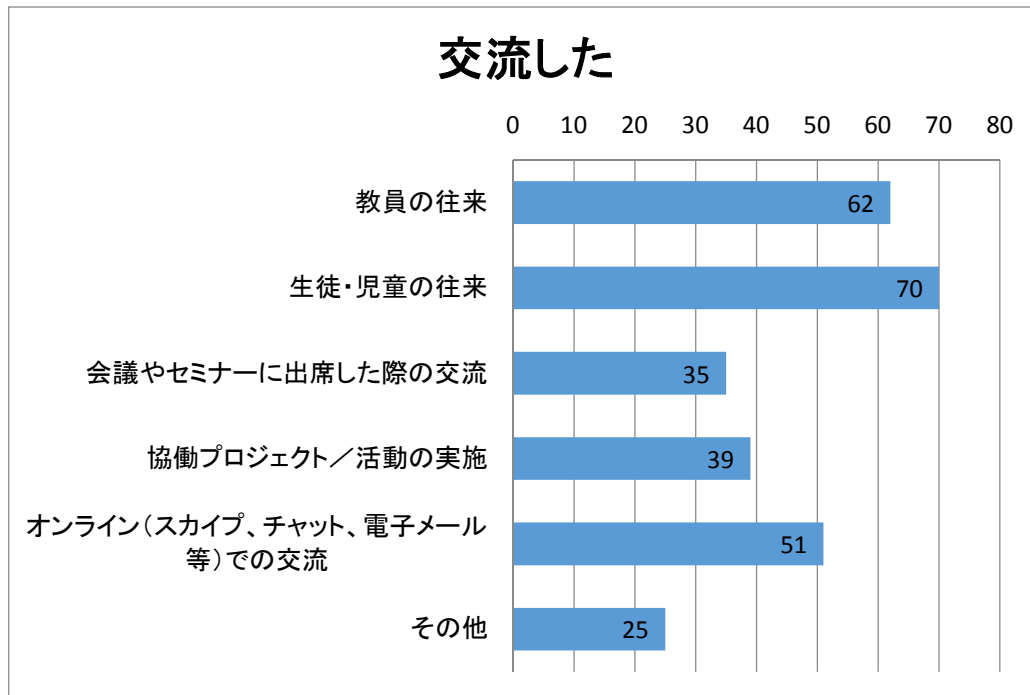
☐ 会議やセミナーに出席した際の交流

☐ 協働プロジェクト／活動の実施

☐ オンライン(スカイプ、チャット、電子メール等)での交流

☐ その他(自由記述)

- ・ 実践交流会の開催
- ・ アートマイル活動
- ・ 学習物の交換
- ・ ケニアの小学校とフラッグの交換
- ・ 図工作品や手紙による交流
- ・ 映像や写真の交換
- ・ 合同授業の開催
- ・ 1週間の共同合宿
- ・ 修学旅行での交流校訪問
- ・ 海外のユネスコスクールと姉妹校締結



交流しなかった場合、以下の内容から選択ください(複数選択可)。

☐ 交流先の学校を見つける方法がわからなかった

☐ どのように交流したらいいのか方法がわからなかった

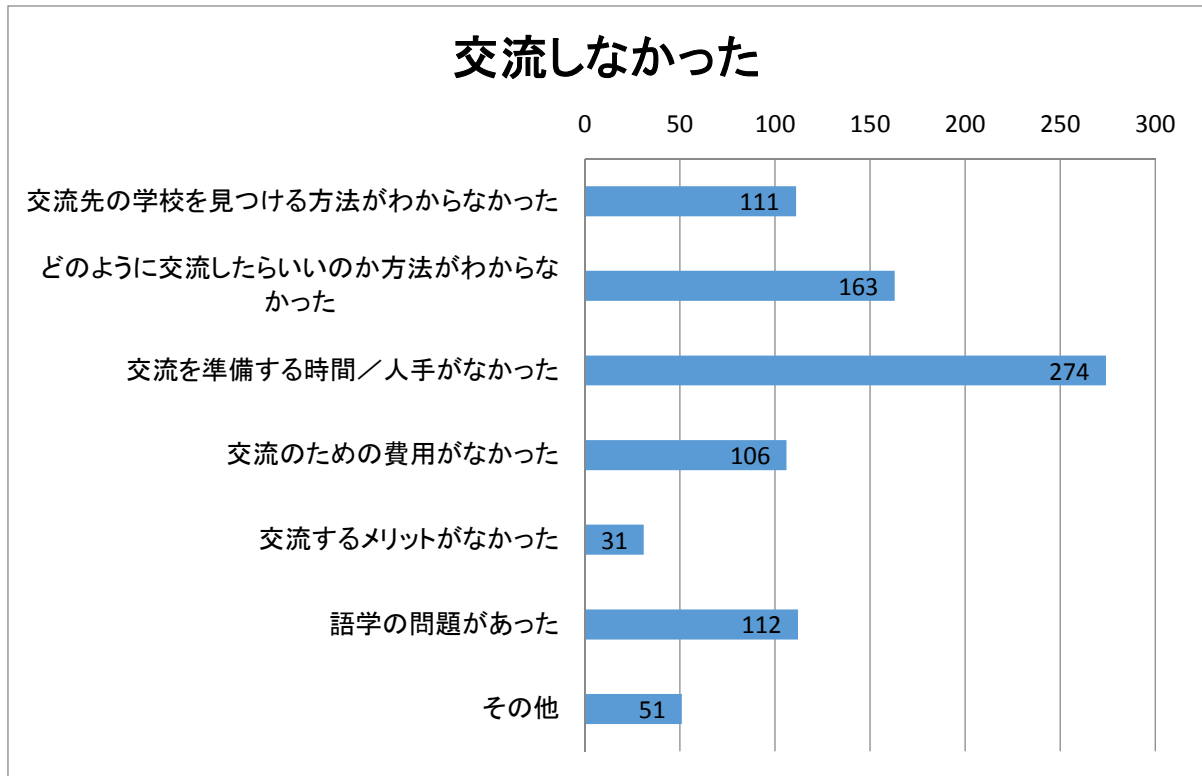
☐ 交流を準備する時間／人手がなかった

☐ 交流のための費用がなかった

☐ 語学の問題があった

☐ その他(自由記述)

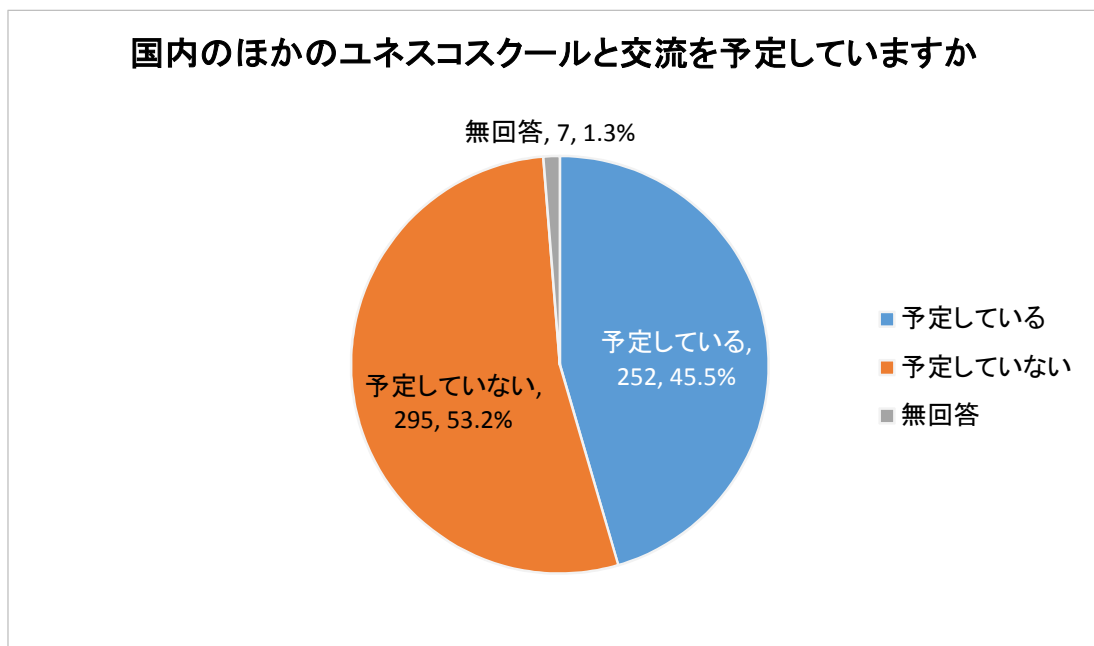
- ・ 計画したが、相手校のインターネット環境の不具合のため実現できなかった
- ・ お互いの学校にスカイプなどの機器がなかったため。
- ・ 活動にかける人的、時間的余裕がない。
- ・ 人手はあるが、活動内容が多く、交流準備の時間が無かった
- ・ NPO を通じて、学校ではない施設の子どもと交流しているため。
- ・ 留学生との交流から進めていきたい。
- ・ 外国籍の児童が多く在籍しており、毎日が国際交流になっている。また、PTAの行事ではあるが国際交流会を行って国際理解に努めている。
- ・ ユネスコスクールには加盟していない姉妹校や提携校などがたくさんあるため、そちらとの交流が優先されるから。
- ・ 既に海外との交流を行っているため
- ・ 今年度からの取組なので、他校と交流するということにまでは至らなかった。
- ・ 交流する必要性のある学習、活動を行わなかった
- ・ 検討中であった



(3) 国内の他のユネスコスクールとのどのような交流を予定していますか。

☐ 予定している

☐ 予定していない



予定している場合、以下の内容から選択ください(複数選択可)

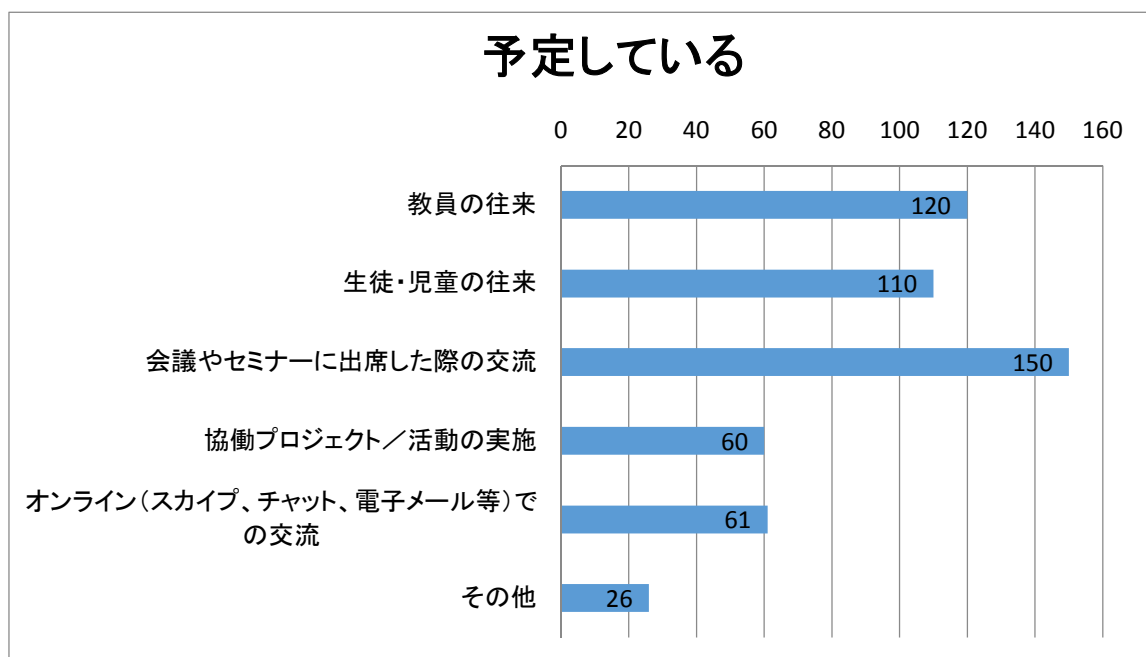
- ☐ 教員の往来
- ☐ 生徒・児童の往来
- ☐ 会議やセミナーでの経験共有・意見交換
- ☐ 協働プロジェクト／活動の実施
- ☐ オンライン(スカイプ、チャット、電子メール等)での交流
- ☐ その他(自由記述)

〔交流の内容〕

- ・ インターネット、手紙、ポスター、ビデオレター等による情報交換
- ・ 作成物の貸し出し交流、作品交換、地域紹介のマップ交換
- ・ ASPUnivNet を通じた交流
- ・ セミナーや研究発表会の参加による交流
- ・ 世界遺産登録地域の学校と活動の情報交換
- ・ 修学旅行での訪問を通してお互いの ESD の取組を発表し合う

〔交流を予定している地域、学校種別〕

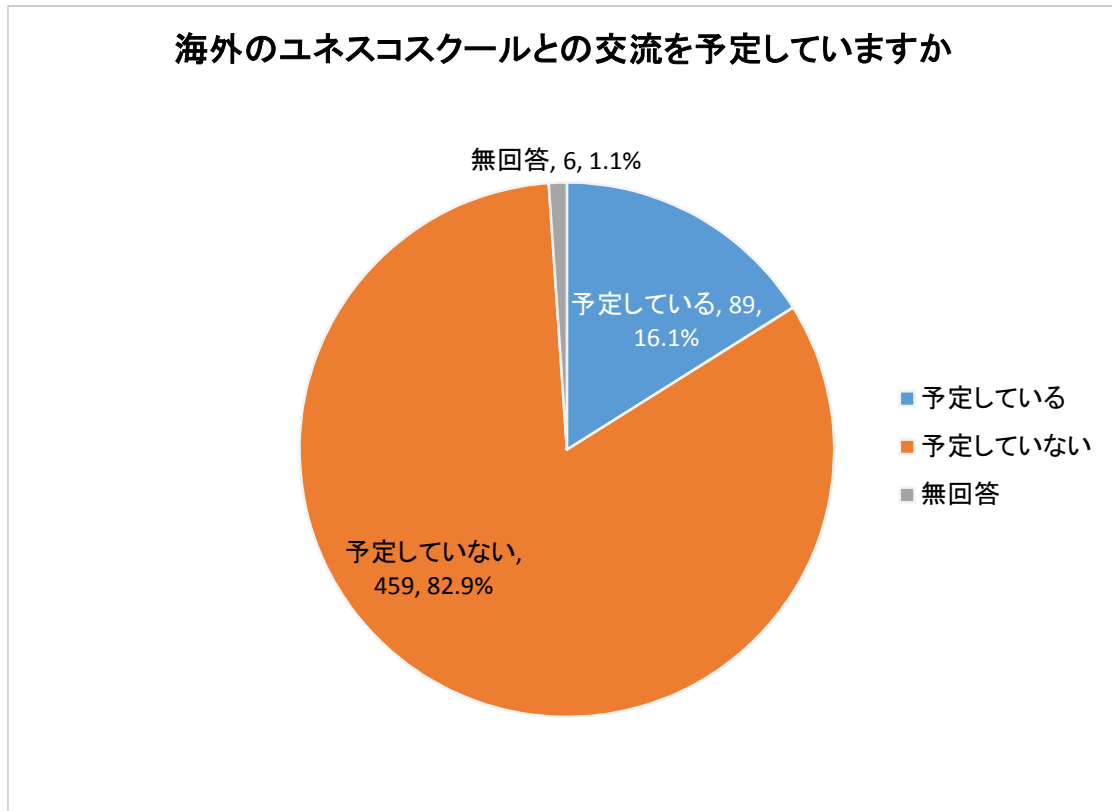
- ・ 市内・県内の幼稚園、小学校、中学校、高校、特別支援学校
- ・ 県外の高校、特別支援学校
- ・ 近隣地区のASPUnivNetの大学
- ・ 姉妹校との交流
- ・ ユネスコ部・ユネスコクラブの学生交流



(4) 海外のユネスコスクールとの交流を予定していますか。(複数回答可)

☐ 予定している

☐ 予定していない



予定している場合、以下の内容から選択ください(複数選択可)

☐ 教員の往来

☐ 生徒・児童の往来

☐ 会議やセミナーでの経験共有・意見交換

☐ 協働プロジェクト／活動の実施

☐ オンライン(スカイプ、チャット、電子メール等)での交流

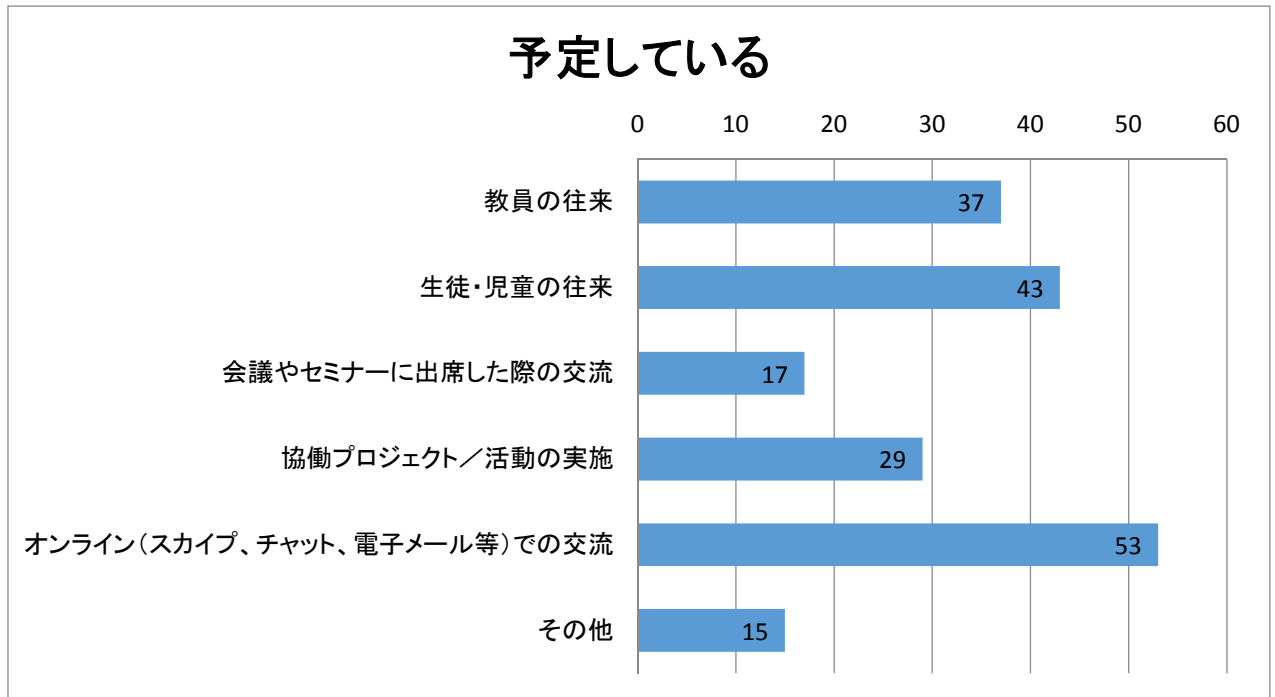
☐ その他(自由記述)

〔交流の内容〕

- ・ 手紙、掲示物、図工作品、プレゼント、学習物等の交換
- ・ 伝統芸能紹介
- ・ 実践交流会の開催
- ・ 修学旅行による学校交流
- ・ 共同合宿、国際会議の実施
- ・ 寺子屋運動への参加

〔交流を予定している国、学校種別〕

- ・ 米国、韓国、台湾、タイ、ベトナム、カンボジア、マレーシア、インドネシア、フィリピン、シンガポール、インド、オーストラリア、英国、ドイツ、オランダ、デンマーク、トルコ



7. 地域の社会教育機関、NPO等との連携などを通じて、開かれたネットワークを構築しましたか

☐構築した

〔連携した団体等〕

大学、研究機関、教育委員会、社会教育施設(公民館、博物館、科学館、民俗資料館、動物園、水族館、生涯学習センター、文化センター、世界遺産センター等)、町づくり協議会、社会福祉施設、消防署、水道局、環境保全団体、青少年宿泊訓練施設、ジオパーク推進協議会、国際交流協会、伝統文化保存会、芸術団体、観光案内機関、自治会、民生委員会、地方裁判所、農協、漁協、森林組合、ユネスコ協会、企業、新聞社、JICA、NPO 法人、PTA、ボランティア団体等

〔学習活動、その他実践等〕

- ・ 大学、官公庁、NPO法人から講師を招き、出前授業や研修を開催
- ・ 地域のユネスコ協会主催のボランティア活動やフォーラムへの参加
- ・ 社会教育施設での課題解決のためのインタビュー、見学、講演図書館からの

必要な資料の紹介と借用

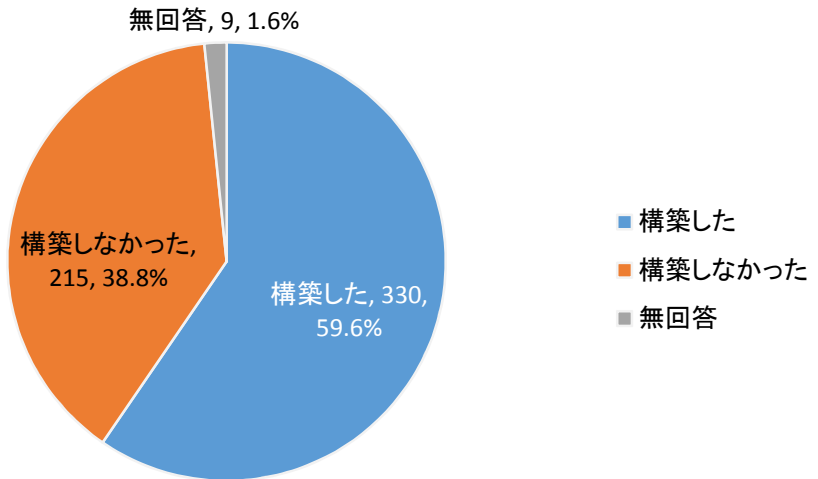
- ・ 修学旅行企業訪問を行い、企業の防災について学習した
- ・ 伝統工芸事業協同組合と連携し、伝統工芸士の方々に教わりながら、伝統工芸体験実習を行った
- ・ 交響楽団とともに地域エールコンサートを開き、収益金を地域の NPO 法人等に寄付をする活動をした。
- ・ 地域の地区公民館で、学習の様子や地域に伝えたいこと等の掲示物を提示してもらい、発信・啓発を図っている
- ・ 国際交流協会と連携して留学生の受け入れや日本語指導を行い、また、地域の祭りに参加した。
- ・ NPO 法人に協力のもと、節電や節水、リサイクルについて体験学習を実施。
- ・ 福祉体験活動において、ハンディキャップ体験を行うため、社会福祉協議会と連携し、ボランティアを派遣していただいた。
- ・ 市の環境課職員を招き、近隣の川の水質調査を行った。
- ・ 地域の農家を学校教育ボランティアとして組織し、地元の農作物づくりや働く人の姿勢を学んだり、食を通して地域交流を行ったりしている。
- ・ ESD Rice Project への参加
- ・ 地域コーディネーターと連携して、世界遺産学習に取り組み、世界遺産学習全国サミットで「古代米」と「団子」の販売を行った。
- ・ JICA 訓練所での研修の実施や、青年海外協力隊員との現地からのテレビ会議による遠隔授業

□構築しなかった

〔構築しなかった理由〕

- ・ 昨年度、活発に行ったため
- ・ どのように連携をしたらよいか分からなかったから
- ・ 時間的余裕や人手がなかったため
- ・ 財政的支援がなかったため
- ・ 当初より、ネットワークを構築する計画がなかった。
- ・ 緊急に構築する必要性を感じていなかった。
- ・ 地域のボランティアや関係機関との連携はすでに十分できているが、ESDを意識した形でネットワークを構築してはいない。
- ・ 立地的に難しかった

開かれたネットワークを構築しましたか



8. 校内外における各種研修に参加しましたか。

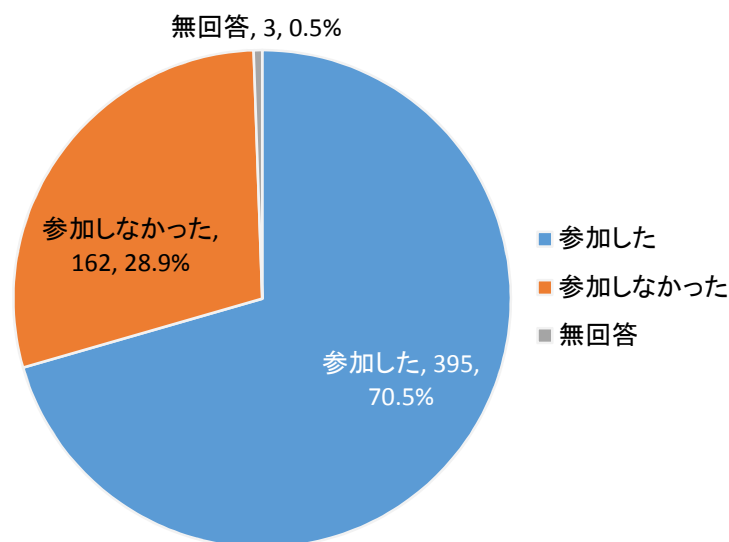
□参加した

- ・ ESD ユネスコ世界会議
- ・ ユネスコスクール世界大会、地区大会
- ・ ESD 日米教員交流プログラム
- ・ 中国政府日本教職員招へいプログラム
- ・ ユネスコスクール交流会、連絡会議、シンポジウム、研修会
- ・ 国立教育政策研究所課題研究発表会(ESD)、
- ・ 研究指定校間で職員の相互派遣
- ・ 地域の ESD 推進協議会
- ・ 県教育委員会・市教育委員会主催 ESD 学習交流会
- ・ ユネスコ運動全国大会、ユネスコ協会主催ユネスコ活動研究大会
- ・ ESD・ユネスコスクール出前講座派遣の仕組み作り検討会議
- ・ 全国小中学校環境教育研究大会
- ・ 日本ユネスコ協会連盟教員研修会
- ・ 環境省主催環境教育・ESD カリキュラムデザイン研修
- ・ 全国模擬国連大会
- ・ JICA 国際教育/開発教育実践報告会 等

□参加しなかった

- ・ 開催地が遠方であったため
- ・ 他の用務で多忙だったため
- ・ 時間的余裕がなかったため
- ・ 日程が合わなかったため
- ・ 出張旅費がなかったため
- ・ 研修の内容がよくわからなかったため
- ・ 自分の学校の研修やプロジェクトで手一杯だったため
- ・ 十分な情報がなかったため
- ・ 必要性をあまり感じなかったため

校内外における各種研修に参加しましたか



9. 学校経営方針等にユネスコスクールの活動に取り組むことを明確に示し、学校全体で組織的かつ継続的にユネスコスクールの活動に取り組みやすくしていますか。

□している

〔教育計画〕

- ・ 教育課程に位置づけ、学習内容を明示している
- ・ 学校理念、学校経営計画にESDを位置づけ、研究推進の柱に置き、学校評価で評価を行うようにしている
- ・ 教育指導計画の中にESD全体指導計画とESD年指導計画(ESDカレンダー)を

記載して、職員が取り組みやすいようにしている。

- ・ 教育指導計画に 3 年間を見通した全体計画と学年別 ESD 計画を作成・掲載
- ・ 学年の学習内容に系統性をもたせ、全職員で共通理解するよう努めた
- ・ 年度初めに今年度の取組について提案している。中間まとめ、年度末まとめを行っている

〔校務分掌〕

- ・ 校務分掌に「ESD 担当」「ユネスコスクール担当」を位置付け、組織的に取り組んでいる
- ・ 校務分掌に「ESD 推進委員会」「ESD 部会」を位置づけた
- ・ ESD 研究研修委員会を組織している
- ・ 担当者が学校組織の中に位置づけられ、定期的あるいは適時にその時間が保障されている

〔ESD カレンダー〕

- ・ ESD 全体計画、各学年の取組内容、教科、総合的な学習の時間、道徳、特別活動、学校行事等と関連づけた「ESD カレンダー」を作成し、毎年、見直し改善を行っている。
- ・ 教科横断的な ESD カレンダーを学年ごとに作成し、年度ごとに更新しながら取り組んでいる。
- ・

〔総合的な学習の時間等〕

- ・ 総合的な学習の時間及び生活科の年間指導計画に、ESD のねらいをふまえた単元を位置づけ学習活動を実施

〔その他〕

- ・ 校長ビジョンに位置付け、学校だより等で、年間を通じてユネスコスクールの活動を伝えている。
- ・ 分掌および関係する教員以外に、ユネスコスクールの活動を十分に知ってもらえていない。
- ・ 学校案内のパンフレットやホームページにしっかりと明記し、学校要覧や教職員の名刺にユネスコスクールのロゴマークを印刷している。
- ・ 学校便りや HP にも掲載して地域へも呼びかけ、PTA や地域と連携し、ボランティア活動等を行っている。
- ・ 学年別 ESD 取組一覧表を作成している。
- ・ 年度初めに、学校長が全校児童と教職員にユネスコスクールへの取組について

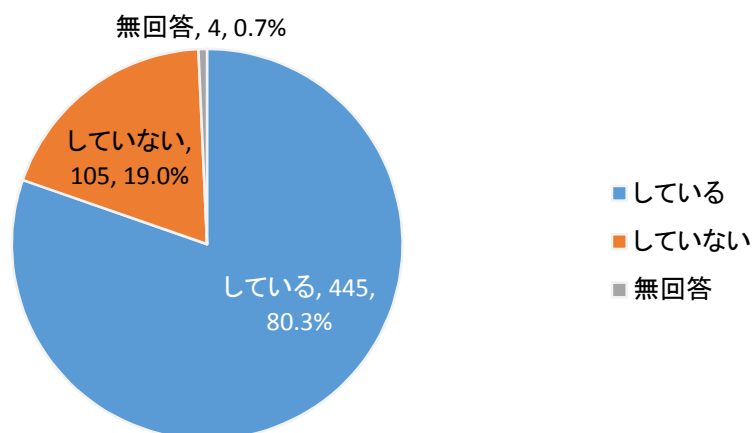
説明

- ・ 本年度よりユネスコ係を設立し、生徒会や部活動だけではなく、より多くの生徒がユネスコ関連行事に参加できるよう改革を行った。
- ・ PTA によるユネスコ委員会と協力し、より円滑な運営を行っている。
- ・ ユネスコスクール・ESD 実践概要図を学校内外に、日本語と英語で示し、教育活動における位置付け、視点を明らかにしている。

□していない

- ・ 学校の組織全体の中でユネスコスクールであるという認識が浅いため。
- ・ 教職員の ESD に対する理解が不十分
- ・ 従来の活動として行っており、ユネスコの理念に見合う活動が実践できているため。
- ・ 国際科や科学部等、学校の一部がユネスコスクールの活動を中心となって継続的に取り組んでおり、学校全体の活動まで至っていないため
- ・ 組織として時間、人員を確保できないため
- ・ 教員定数減により、核となる担当部署が運営されなくなり、人事異動際の引き継ぎが最低限しか伝達できなくなったため。
- ・ 学校経営計画には示しているが、校内での体制が整っていない
- ・ 地域の事情、学校の事情等で他に優先すべきことがあるため。
- ・ 次年度に向けて準備中のため。
- ・ 負担感が強く、担当が個別で請け負わざるを得ないから。
- ・ なかなか校務分掌に位置づけが難しい。
- ・ 具体的な方法がわからなかった。

ユネスコスクールの活動に取り組みやすくしていますか



10. ユネスコスクールの活動を自らの学校評価の項目に盛り込み、活動の質の向上に努力しましたか。

☐ 努力した

〔学校評価〕

- ・ 年度末や学期ごとに行う教育活動の評価に設定し、結果を見て改善など行うようにしている。
- ・ 児童アンケート、保護者・教師アンケート等を活用して、活動内容や児童の育成状況等を踏まえた自己評価を行い、活動内容やその評価について学校評議員会並びに学校関係者評価委員会に伝え、活動内容に対して評価された。
- ・ 学校評価に盛り込まれており、職員間で活動の反省を行い、次年度に向け活動の質の向上を目指して話し合った。
- ・ 学校評価の項目にESDに係る経営目標、目標達成のための方策、取組指標、成果指標、取組の自己評価及び成果の自己評価を明示した。評価に基づく分析結果を明記し、課題とその解決策の検討と次年度に向けての対策を立案した。
- ・ ユネスコスクールとは明示していないが、ESD 教育の推進について記載し、学校評価にも入れている。

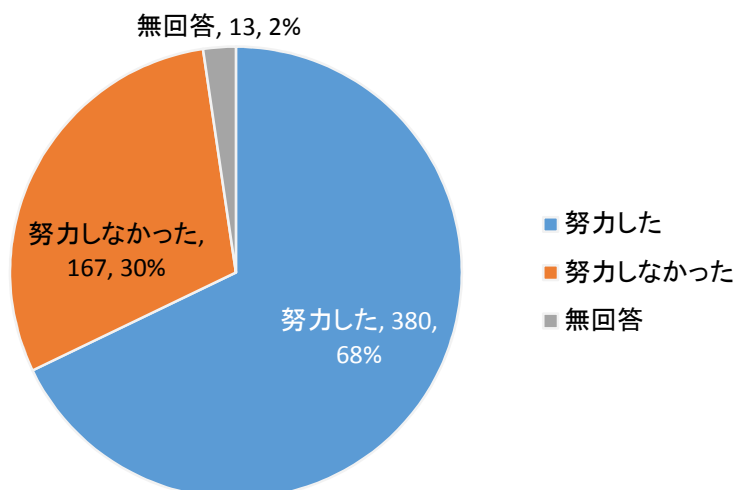
〔学校評価以外の取組〕

- ・ 担当教員の自己分析表にユネスコスクールとしての活動欄を設け、1 年間継続して分析・評価を行った。
- ・ 学校評価や学校関係者評価などの自己・外部評価だけでなく、積極的に専門家の第三者評価を取り入れて、PDCA マネジメントによる評価活動を実践している。第三者評価については、実践成果を論文にまとめて様々な公募論文に応募し、各専門家の視点から評価・助言をいただいている。
- ・ 学校内評価とは別に経過達成状況を学校評議会に提出し、外部評価を受け、成果と課題を明らかにして次年度の活動計画に生かしている。
- ・ 児童・保護者アンケートにESD 関連の項目を設定した。
- ・ 児童、保護者、地域へのユネスコスクールの活動に対する啓発活動(リーフレットの作成、掲示板・看板の設置、便り、HP の発信
- ・ 学校評価の項目には入れられていないが、町の一貫教育研究会の評価項目に入れられており、自己評価が行われている。
- ・ SSH 事業におけるESD 活動と連携し、評価基準を作成し、年度末に外部指導委員により評価を受けている。

□努力しなかった

- ・ 学校評価項目に入っているが、授業研究に力を入れたので ESD は昨年並みにも行えていない。
- ・ 学校評価の項目にまでは考えていなかった。
- ・ 学校評価項目に類似の項目があるから
- ・ 保護者や地域への周知ができておらず、学校評価に盛り込むことができないため。
- ・ 学校評価の項目に入れるには、十分認識されておらず、評価が難しいと考えたため。
- ・ 地域の事情、学校の事情等で他に優先すべきことがあるため。
- ・ 活動を開始したばかりであり、現在検討中のため。
- ・ 他の教育活動の評価がユネスコスクールとしての評価と関連があると考えたから。
- ・ クラス単位での活動でユネスコに関する活動を行っていたため、学校単位では行っていない。
- ・ 学校評価は、数年間変更しておらず経年変化を調べているために、項目変更は見合わせている。
- ・ どのように評価すべきかわかりにくい。
- ・ 市教委主導の学校評価を利用したため
- ・ ユネスコスクールの活動として特に評価する必要性を感じなかった。

活動の質の向上に努力しましたか



11. 今年度の活動を実施するにあたり、ユネスコスクール大学間支援ネットワーク(ASPUnivNet)加盟大学をはじめとする高等教育機関の支援や協力を受けましたか。

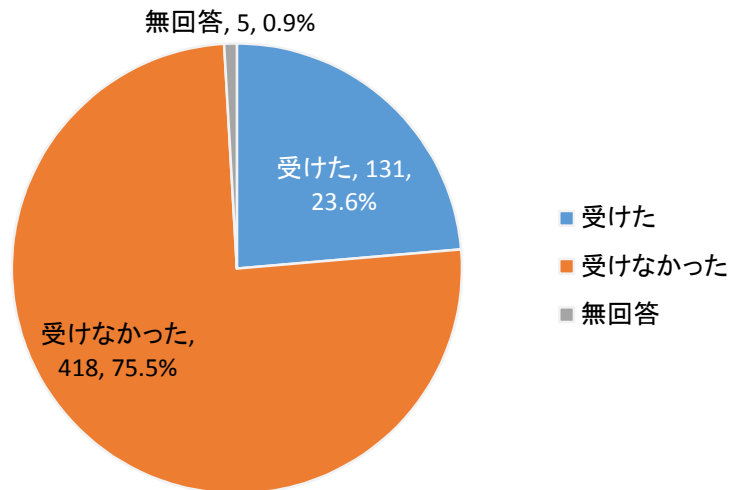
☐ 受けた

- ・ ユネスコスクール加盟申請にあたり、加盟大学に助言をいただいた。
- ・ ESD コンソーシアムの支援を受け、講師の謝金等を準備した。また、ユネスコスクール世界大会等に教員を派遣し、交流研修を推進した。
- ・ ユネスコスクール世界大会高校生フォーラムの開催にあたり、ASP ネットワークや大学とユネスコスクールが協力し準備から実施までを行った。
- ・ 大学より ESD 授業研究における指導助言を受け、留学生の紹介、大学からは ESD 視点による教科横断型学習プログラムの開発に関する支援を受けた。
- ・ 大学が主催するユネスコスクールのネットワークの会議に参加した。
- ・ 大学のユネスコクラブと交流を行った。
- ・ 大学からタブレットを借用して、大学生のサポートを得ることもできた。
- ・ 加盟大学の支援を受け、講師を派遣してもらい、授業や校内研修でのゲストティーチャーとして協力いただいた。
- ・ 取組リーフレット英訳版を作るために翻訳者を紹介してもらった。
- ・ ユネスコスクール全国大会参加旅費や県ユネスコスクール交流会の旅費の支援を受けた。

☐ 受けなかった

- ・ 支援や協力の手順を知らないため。
- ・ 支援ネットワークがあること自体、認識していなかったため。
- ・ 今の段階では、そこまで活動を広げられないため。
- ・ 準備の時間不足のため。
- ・ 連携する人材も資金もないため。
- ・ 機会が無かったから。
- ・ 立地的に遠方にあるため。
- ・ 受ける必要がなかったため。
- ・ 他の研究機関と連携しているため。
- ・ 校内や地域における取組を充実させることを主にしていたため。
- ・ 大学の附属校なので、そちらとの連携が重視されるから。

ASPUivNetの支援や協力を受けましたか



12. ユネスコスクールの活動を支援するためのユネスコスクール大学間支援ネットワーク (ASPUivNet) 加盟大学からどのような支援を期待しますか。

- ・ 人的支援(専門家派遣の仲介、学生学習ボランティアの支援等)
- ・ 物資支援
- ・ 資金援助
- ・ 出前授業、講師派遣
- ・ 公開講座、講演会、教員研修、ワークショップ、情報交換会等の企画・開催
- ・ 各学校の特色を生かした、より効果的なユネスコスクール活動の進め方についての指導・助言
- ・ 学習プログラム作りや理論と実践を結びつけた検証の在り方、評価方法の助言
- ・ 海外と交流する際の翻訳・通訳等の仲介支援
- ・ 大学教員や学生、留学生との交流
- ・ ESDの先進的取組、ユネスコスクール加盟校の実践例、海外のユネスコスクールの活動状況等の紹介、発信
- ・ 国内外のユネスコスクールとの交流に関する調整
- ・ ICT支援、機器の提供
- ・ ユネスコスクールと大学、教育委員会、企業などのコンソーシアムの形成
- ・ 教材の開発、検証、貸し出し
- ・ 大学施設の利用

13. ESD を通じて育てたい資質や能力を明確にし、自分で、あるいは協働して、問題を見出し、解決を図っていく学習の過程を重視した教育課程を編成するよう努めましたか。

☐ 努めた

〔教育課程等〕

- ・ 教育課程のアクションプランに ESD の項目を位置づけた。
- ・ 生活科・総合的な学習の時間の授業研究を通して、教育課程を編制・実施・評価をしている。
- ・ ESD カレンダー(年間指導計画)をもとに全学年で取組み、実践を通して学習活動等の見直しと改善を図っていった。
- ・ 教育課程の中でどのように取り組んでいくのか、あるいは児童にどのような資質や能力を育てたいかを明らかにし、ESD 取組一覧を作成した。
- ・ 教職課程における教員養成科目およびゼミ(教育学演習)において、学校現場における ESD に焦点化した授業づくりの具体的方法論について、とくに教員志望の学生に効果的に伝えてゆけるようなカリキュラム編成に努めている。

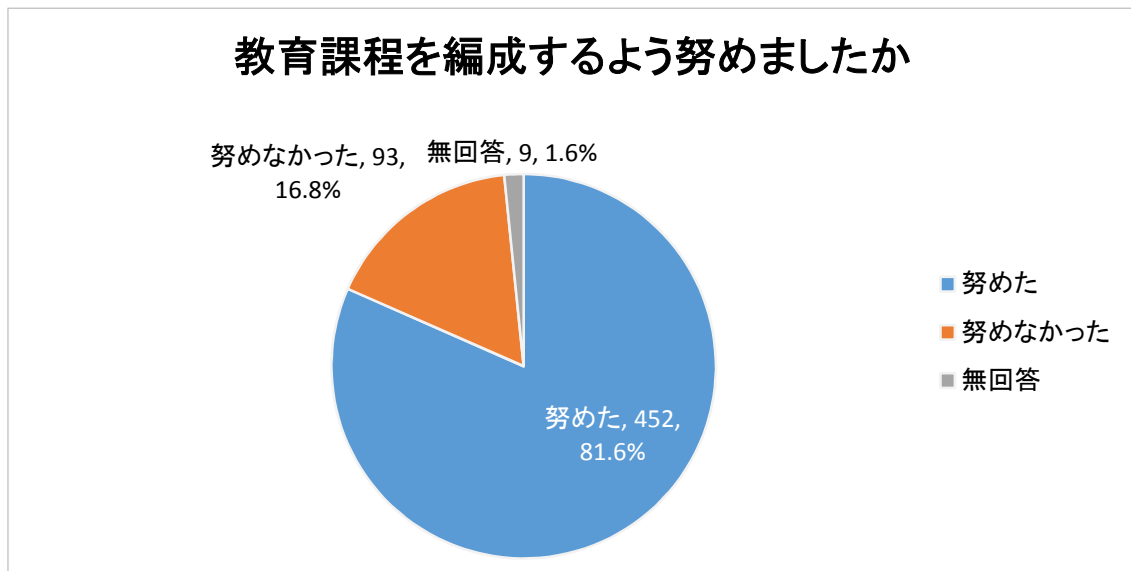
〔学習活動等〕

- ・ 独自のホールスクールアプローチを開発し、全校で ESD を取り入れた授業や校外活動などを展開した。また、問題を解決していく場面では、協同的な学び合いを取り入れながら、子供の主体的な活動を支援しながら進めるよう努めた。
- ・ 学区を教材化し、学区の良さを把握した上で問題点を見出し、その改善策を考え行動するという学習過程を基本形とする授業実践を行った。ESD チェックシートを活用し、どの ESD 概念を扱い、どんな力を育んでいきたいのかを明確にして、授業に取り組んだ。
- ・ ESD の学習で身に付けさせたい 4 つの資質・能力、3 つの態度を観点にして、各教育活動を生徒に自己評価させた。PDCA としてその結果を分析し、次の活動へつなげた。
- ・ 全教職員にアンケートを取り、成果と課題を洗い出し、課題に対する次年の取組を設定した。
- ・ 総合的な学習の時間においては学習内容を見直し、各活動に ESD 視点による新たな評価基準(グレード表)を設定し、学習評価と結びつけた。また、各教科においては、教科横断型の単元学習プログラムを提案・実践した。

☐ 努めなかった

- ・ ESD を通じて育てたい資質や能力を明確にし、学校全体として共通理解するまでに至っていなかったから。

- ・ 重要性は認識しつつも、焦点化・重点化が難しかった。
- ・ 総合的な学習の時間が減り、問題解決型の学習に多くの時間が使えないため。
- ・ 時間、人手不足
- ・ 学校長及び教職員の異動により ESD について詳しく理解しているものがなくなったため。
- ・ 本校の教育目標をもとにした教育課程は ESD が目指しているものを内包していると考えたため。
- ・ 現在構築中のため
- ・ カリキュラム編成時に他の優先課題があったため
- ・ 今のところそこまでの必要性を感じていないから。
- ・ 指導要領とカリキュラムの改訂等に対する取組で手一杯だったため。
- ・ 教育課程の中での明確な位置づけができてはいるが、わかりにくい状態にある。



14. 総合的な学習の時間を中心とした教科横断的な指導計画を立てるなど、指導内容を適切に定め、さらに、指導方法の工夫改善に努めましたか。

☐ 努めた

- ・ 研究内容と大いに関連することなので、具体的な単元を決め、教科・領域等との関連を示す指導計画の作成に努めるとともに、探究的な学びになるよう指導法の研修にも努めている。
- ・ ESD カレンダーには各教科・領域との関連を、線でできるだけ分かりやすく表記した。
- ・ 教科で身に付けた力が総合的な学習等でも生かされるような教科横断的な指導計画を立てた。たとえば、地域学習において、見学や調査、表現などの活動を設定し、

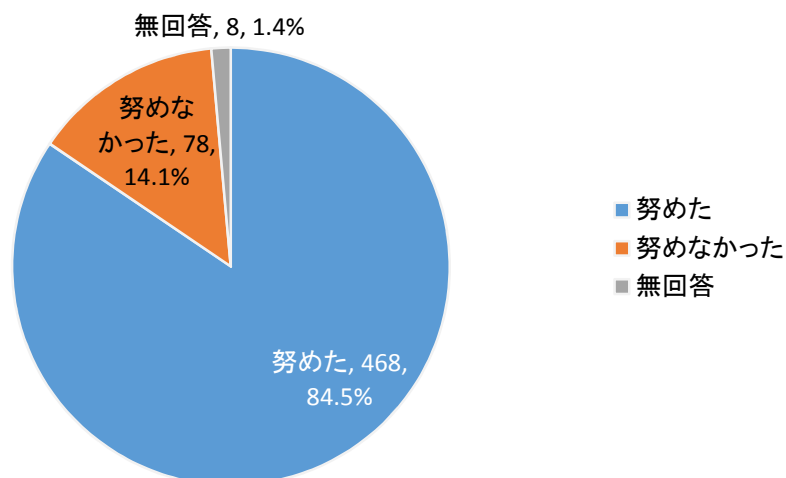
社会科で身に付けた資質・能力が発揮できるようにしたり、表やグラフの読み取りなど算数科学習で身に付けた力を情報の分析に生かすようにしたりした。

- ・ 企業や上級学校、施設訪問や就業体験、社会人講話などを計画して指導内容を適切に定め、指導方法の工夫改善にも努めた。
- ・ 総合的な学習の時間においてプレゼンテーションの実施や、パネルディスカッション、ディベートに取り組み、設定されたテーマについての現状と課題について議論した。
- ・ カリキュラムをたてて、他教科とも連携をした。校外学習などでは、歴史学習や現地学習、語学プログラムの充実、情報科と連携してICTを活用した発信などをおこなった。

□ 努めなかった

- ・ 時間、人手不足。
- ・ 校内他教員の理解を得ることができなかったため。また、総合的な学習の時間が教科に吸収されており、教科を超えたカリキュラムが組めなかったため。
- ・ 各教科の教員としっかり ESD に関して議論する時間がなく、また、全員が ESD の概念や意義を理解しているわけではなく、授業レベルでの工夫は出来なかった。
- ・ 総合的な学習で実施すべきことが多くあるため
- ・ 学年によって指導内容や指導方法にばらつきがあり、学校全体としての取組として改善が不十分といえる
- ・ ほとんどのユネスコ活動が部活動やコースの課題活動として行っているため、教科書横断的な指導計画を立てなかった。
- ・ 日頃、行っていることが、ESD に取り組んでいると考えている。
- ・ 急激な生徒数の増加により、指導内容の見直しが必要な事業があったため。

指導方法の工夫改善に努めましたか



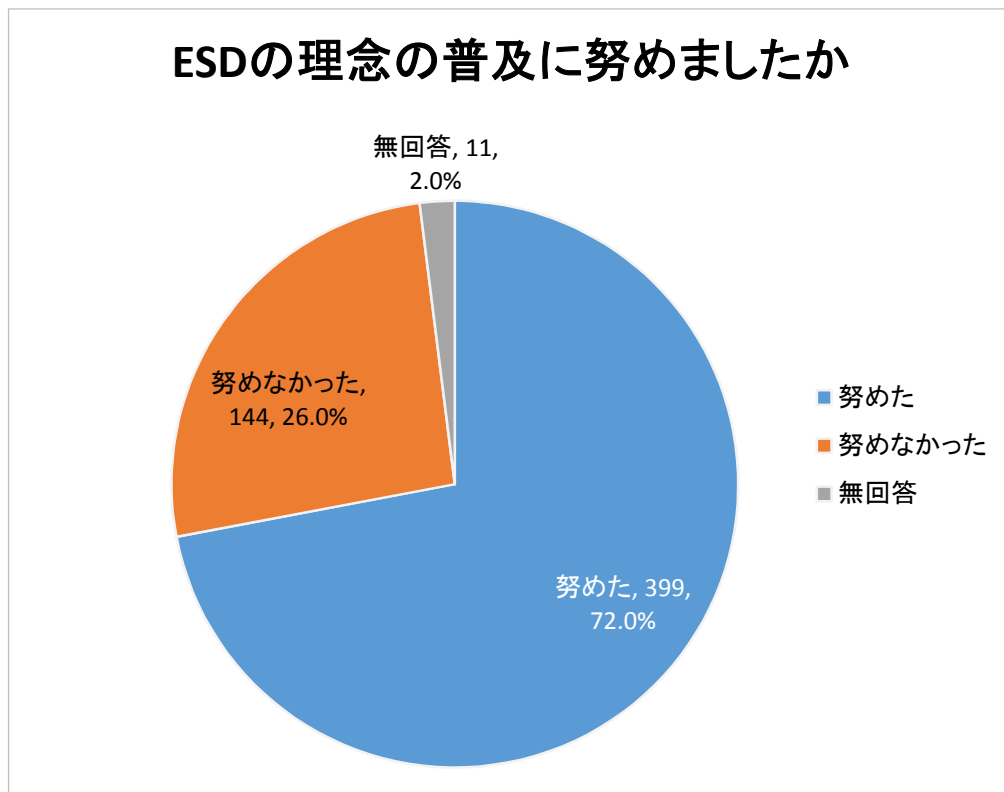
15. ESD の推進拠点として、研究・実践に取り組み、その成果を積極的に発信することを通じて、ESD の理念の普及に努めましたか。

☐ 努めた

- ・ 地域のESD 行事に参加し、展示や発表を行うことで、近隣の小中学生や地域の人々に活動内容を知ってもらうことができた。
- ・ ESD ユネスコ世界会議のサイドイベントに参加した。
- ・ 学校のホームページや SNS、学校だより・学級だより、パンフレット、学習発表会などによる広報や社会教育施設での掲示等を利用した広報
- ・ ESD の取組をまとめ、ユネスコスクール ESD 優良実践事例集に投稿した。
- ・ ユネスコ協会の地区ブロック大会において、職員が実践発表を行った。
- ・ 国連防災世界会議において、防災教育の取組の実践発表を行った。
- ・ 地元の新聞やラジオ、テレビ、地元のユネスコ協会の記念誌に取組が紹介された。
- ・ 日本ユネスコ国内委員会 ESD フェイスブックに ESD 全国探訪レポートとして掲載された。
- ・ ユネスコスクールの活動を広めるために、広告ビブスやのぼり旗を作成した。
- ・ ESD 愛称募集に応募し、大賞に選ばれた。
- ・ ラジオ出演を積極的に行い、生徒の活動について情報発信に努めた。

☐ 努めなかった

- ・ 余裕がなく、ほとんどが校内や家庭での普及にとどまった。
- ・ 成果が上がっておらず、発信するに至っていないため。
- ・ 特に発信をする必要性がなかった。
- ・ 自校の取組を充実させることで精一杯だった。
- ・ ホームページ作成に堪能な人材がいない。
- ・ 具体的な方策が分からなかった。
- ・ 学習の成果をいろいろな形で発信しているが、それが ESD の理念の普及につながっているとは必ずしもいえないから。
- ・ 町教育委員会が町内の取組をまとめ発信している。



16. 今後のユネスコスクールの活動について、特に重視すべきと考える分野を選択してください。(複数回答可)

- ☐ 環境
- ☐ エネルギー
- ☐ 防災
- ☐ 生物多様性
- ☐ 気候変動
- ☐ 国際理解
- ☐ 世界遺産や地域文化財等
- ☐ 平和
- ☐ 人権・福祉
- ☐ 食育
- ☐ エコパーク
- ☐ ジオパーク
- ☐ その他(自由記述)

〔その他〕

- ・ 健康、福祉
- ・ 復興
- ・ 公害問題、街づくり
- ・ 世界の水問題
- ・ テロとの戦い
- ・ 少子高齢化社会
- ・ 教育
- ・ コミュニケーション力の育成
- ・ 伝統文化
- ・ 地域貢献、地域交流
- ・ 国際交流
- ・ 女性
- ・ LGBT
- ・ キャリア教育
- ・ 地球市民教育、文化の和解、心の教育(心理教育的支援)

17. ユネスコスクールに加盟し、ESD の推進拠点となったことで、どのような変化がありましたか。(変化の内容及び考えられる要因を記述)

(1)児童生徒の変化

- ・ 受動的な学習ではなく、自ら関わり、人から学ぶことを意識した学習ができるようになった。他の生徒との関わりから新しい価値観に触れ、社会で活躍する人との関わりの中から社会の成り立ちや多様な価値観・自分の将来にわたる存在意義を意識した学びを得られるようになった。
- ・ 子ども達が課題解決のために集めた情報をグループで整理・分析し、自分たちにできることを考えて実践する姿が見られるようになってきた。
- ・ 地域や社会に目を向けるようになったことや自分たちが同社会と関わっていけばよいのかを考える子どもが増えた。
- ・ 生徒が自主的に研究会やイベントを開催し、自ら広く社会にESDを発信しようとする取組を行うようになった。また、生徒が中心となってNPOを立ち上げ、自主的に活動するようになった。
- ・ 国際交流や国際教育に関心を持つ生徒が年々増加している。入試の面接で受験生がユネスコスクールであることを志望理由にしたり、ESD の側面としての国際教育に魅力を感じる生徒が増えてきている。
- ・ 自分の力に自信をもち、学習意欲が向上した。

(2)教員の変化

- ・ 子どもたちに考えさせる授業をしようという意識及び教材研究が深まった。また、その単元全体や各活動を通して、子どもにどんな力を付けたいのかを自らに問う姿勢が見られるようになってきた。
- ・ 問題解決型の学習方法に対する教員の指導技術が向上した。
- ・ 地域との連携することの重要性について理解が高まり、連携も積極的かつ計画的に取り組めるようになってきている。地域の素材、人材に興味を持つ教職員が増え、地域の素材の教材化を積極的に行うようになった。
- ・ ESD について研修に出かけ、校内で報告を兼ねた研修を行うことで ESD に対する理解が深まり、やらなければならないという負担感が減った。
- ・ ESD を進めるための指導方法について検討し、さらに積極的に外部の専門家から教えを請う姿勢が見られている。
- ・ ESD 国際実施計画等で求められている教授法は多くの科目で実践されているが、教科指導重視の高校では、教員のセクト主義や受験学力養成などの側面から、教員によって ESD に対する温度差があるのも事実である。
- ・ 知識を教え込むことから知識の使い方を考えさせることや、授業内における教師の役割をコーディネーターとして考え直すなどの変容が見られた。

(3) 学校運営の変化

- ・ ESD 推進委員会が設置され、学校の組織として活動するようになった。
- ・ 学校長の目指す学校経営計画の具現化に参画し、それぞれの教員ができることを具体化した。
- ・ 地域や保護者と連携・協働した学習内容となるよう学校運営を見直すことができた。
- ・ 今までやってきたことを系統化し、価値付けすることによって目標を明確にし、実践を意欲付けることができた。
- ・ 積極的に職員に研修の機会を与え、校務分掌にユネスコスクール担当を位置づけることで、校内研究体制の活性化を図ることができた。
- ・ 少子化の中で、定員を超える生徒が来るようになり、学校のイメージアップになっている可能性もある。

(4) カリキュラムや教授法の変化

- ・ 生徒が主体となって活動することを評価し、それを支援するための指導へとシフトしている。従来型の指導方法ではなく、「アクティブラーニング」への方向性を持った指導方法の確立を学校全体の目標となりつつある。
- ・ 知識・技能の習得や活用にとどまらず、体験、体感を重視して、探求や実践を重視する参加型アプローチを実践し、活動の場で学習者の自発的な行動を上手に引き出すようにした。
- ・ 協働場面において、より児童が主体的に考え、練り上げていける思考ツールを導入

した。思考ツールは活動の中身によって適切なものを選ぶよう検討を重ねた。よって協働場面で、子どもの思考力や発信する力が高まった。

- ・ 知識の詰め込み、講義形式だけではなく、グループディスカッションを積極的に取り入れようとする気運が高まった。平常の授業で言語活動を充実させようとする取組が始まった。
- ・ 教職員が「何をすればよいか」に悩むのではなく、「児童に何を考えさせたいか」「児童にどんな心を育てたいか」を考えながらカリキュラムを構築できるようになった。教職員が目標(ゴール)を意識した上で、地域の豊かな環境や人材・教材を見て、そこから児童と一緒に課題を見つけ、児童が主体となって調べ学習や体験活動を行う中で、教職員がそれをコーディネートしていくスタイルに変わってきている。
- ・ 授業にワークショップ方式やディベート、課題研究を取り入れるなど、生徒の発表力・思考力・問題解決能力を育成する取組を行うようになった。

(5) 保護者・地域との関係の変化

- ・ ESD を期待して転入する児童もいることから、保護者・地域の期待は高い。
- ・ これまでゲストティーチャーとして協力してくれていた農家やスクールガードリーダーの他に、地域に昔から住む方や市役所の環境課など、新たなゲストティーチャーの開発ができ、幅が広がった。地域と開かれたネットワークを築くことができた。
- ・ ESD 活動を行うにあたって子どもたちが地域に出ることが増え、地域の人が地域清掃をはじめとする取組をしている生徒の姿を間近で見たり、報道で知ったりして「自分たちが暮らす地域にユネスコスクールがある。」と学校の取組を誇りに思い、支持してくださる方も増えてきた。
- ・ ESD 講演会をワークショップ形式で行い、教師や保護者地域が一緒に現実的な課題や未来に大切にしたいことを円卓で対話をした。思ってもみなかったほどの活気にあふれ、保護者も地域も前のめりでワークショップのひと時を過ごした。後日のアンケートでは、もっとこのような機会を増やしてほしい、家庭でも子どもと一緒に考えてみたい等、ESD の考え方やユネスコスクールの役割について理解を得ることができた。
- ・ 異学年交流、地域交流活動を学校公開等で見た後のアンケートには、わが子を本校に入学させて良かったとの感想が多く、PTA のサークルも発足し、そこでも児童を育てようとする取組が行われている。

(6) 他校との交流の変化

- ・ 海外の学校との交流が増え、いずれも授業の中で自文化の紹介、相手の文化への理解が求められた。意見交換やプレゼンテーションなどを通じて、相互理解の精神を養成できる機会となっている。
- ・ 教員間のつながりが生徒間、学校間交流へと発展し、他県の中学校と直接情報交換する機会を得ることができた。
- ・ 会議への参加を通して、今まで交流がなかった学校ともつながる機会が増え、その学校の実践例に触れる中で、自校の課題に気づくことができた。
- ・ ESD ユネスコ世界会議に出席していた海外のユネスコスクールの教員が視察に訪れ、交流が実現した。海外のユネスコスクールと来年度から交流の計画が進んでいる。
- ・ ユネスコスクールの加盟を検討しようとしている他校からの問い合わせを受けることがあり、ユネスコスクールを通じてイベント等の連携機会を模索・検討することもできつつある。
- ・ 交流の対象校とだけの交流で終わらせるのではなく、交流することで目的に合った交流校を広げていくような意識に変わり、交流の範囲が広がってきた。

(7)その他

- ・ 先進的取組等に興味が出て、参考になることは取り入れようと前向きな姿勢で各種研修会に臨むようになった。
- ・ ESD の推進拠点校になったから特別なことをするわけではなく、これまでの教育体制の中で、できる範囲での活動をしているので、特に推進拠点として効果や変化はない。
- ・ ユネスコスクールの認定連絡が年度後半であったため、具体的な効果までは検証できていない。

18. ユネスコスクールとして ESD に取り組む際の課題、問題点はありますか。

- ・ ユネスコスクールの利点が見えにくい。
- ・ 活動内容が何をすればいいのかわからない。
- ・ ESD という言葉や概念、効果が教職員、保護者、地域の方々に理解されにくい。
- ・ ユネスコスクールとしてボランティアや地域への活動を広げていったとき、休日の活動や教育課程外の活動も出てくる。その時の推進する教職員の身分や手当等の保障、参加する子どもたちの活動のための経費や時間等の保障が必要と考える。
- ・ 事務手続きが簡略化され、他校や大学との交流が容易にできるようになれば、ESD の取組がもっと充実したものになると考える。
- ・ ESD の理念がすべての学校運営につながるものとして捉えさせれば、特に課題、問題点はないように思う。

- ・ 学校5日制の下で、また現状の大学入試制度の下で、授業時間数を確保しながら、より効果的にユネスコスクールの諸テーマ、ESD の学習に取り組むことに苦慮している。
- ・ 教科の学習と連携した効果的な学習計画の作成をするにあたり、作成のための資料集や作成の時間的な余裕が持てない。
- ・ 教師に多忙感がある。
- ・ 教師個々のESDについての理解と実践するための力量に差があること。
- ・ 指導者の確保に課題を感じている。特に高い専門性を要する活動について、現在の指導者も高齢で、その後継者もいないといったケースがあり、将来的にとて不安を感じている。
- ・ 予算がつかない場合、教材の購入やゲストティーチャーを呼ぶことが難しくなる。
- ・ ESD の取組は各校独自に実践することができるが、ユネスコスクール間の交流について、相手先とのマッチングや連携方法の確立が課題と考える。
- ・ アンケート・報告が多すぎると教員が取り組む上で負担になると思う。
- ・ ユネスコスクールとしてクローズドなネットワークにするのではなく、一般の学校も活用できるネットワークになることが望ましい。ユネスコスクールが目的ではなく、ESD 推進が目的であり、そのための有効なリソースとして価値をもてるかだと思う。
- ・ 取組にあたって、公立高校と私立高校に差があることを感じる。公立高校の加盟校が増えれば、公立高校を主体とした運営が行なわれることは事実。
- ・ ESD としての活動をどうすればより充実したものになるのか、活動がマンネリ化しないようにしなければならない、という課題はあると思う。
- ・ 本来であれば国連システムの理解などユネスコの理念(広義の平和)を実現する学校がユネスコスクールの使命であるが、ESD の進展により本来の理念への意識が埋もれているように感じる。ただ、ESD 自体が包括的な教育であるので、広義の平和を実現するための諸教育活動が ESD に内包されている。ユネスコスクールの本来の使命を忘れないようにしたい。

19. ユネスコスクールとしての活動費の補助が必要と感じますか。感じるとすればどのような活動に必要ですか。

- ・ 旅費やバス借上げに伴う学校間交流や研修
- ・ 講師を招へいた研修
- ・ ポスターやパンフレットやリーフレット、ウェブサイトを使った広報、発信
- ・ 情報機器、オンライン通信機器等を利用した他国や他県との交流活動
- ・ ビオトープ等の環境整備
- ・ 材料費や消耗品費、郵送・運搬費が必要となる製作活動
- ・ 施設使用料のかかる施設見学

- ・ 保険料や児童の安全を守るための道具が必要となる体験活動
- ・ 楽器や衣装等が必要となる伝統文化に関する体験学習
- ・ 留学生や他校を招き、学校の取組の発信や成果報告等を行う交流会の開催
- ・ 学校独自で行っていることを ESD の理念に当てはめて行っているため、必要と感
じない。

20. ユネスコスクールのネットワークを活用して今後どのようなことがしたいとお考えですか。

(1) 生徒児童に関すること

- ・ 近隣ユネスコスクールとの情報交換や交流活動
- ・ 他県や海外のユネスコスクールとの交流活動(訪問、メール交換、スカイプなどを利用
したディスカッション、テレビ会議等)
- ・ 学習成果発表会
- ・ 他校の生徒を招いて取組事例紹介をしてもらう
- ・ 子どもが主体となって議論討論する場の設定
- ・ ユネスコスクールとして取り組んでいるテーマに関わる内容について大学の学生に講
義を受ける。
- ・ 県や市の特性を生かしたプログラムを組み、学校間での交流の場を設けるなどして生
徒間での話し合いを行いたい。教育委員会など、行政が主催し、地域の小学、中学、
高校、大学が垣根無く、議論を行える場を設けてほしい。

(2) 教員に関すること

- ・ 教員の研修会や交流会への参加
- ・ 魅力的な教材開発
- ・ 国際交流活動
- ・ 取組内容や指導方法、評価方法の情報交換
- ・ 講師を招いた校内研修やワークショップの実施
- ・ 他のユネスコスクール視察
- ・ テレビ会議

(3) その他

- ・ ユネスコスクール大学間支援ネットワーク加盟大学との連携
- ・ ユネスコ協会や市民ボランティアの方々と協力連携した、地域での活動
- ・ 協力企業の支援を活動に生かしたい。
- ・ いろいろな地域と交流することで自分たちの地元の良さを再確認させて地域の活性化
に結びつけたい。
- ・ 国内外の同年代の高校生同士で持続可能な社会づくりについて議論する機会是非常

に教育効果が高いものであるので、定期的開催し、多くの生徒・教員が関われるように支援していただきたいし、可能であれば主催したい。

- ・ 隣国である中国および韓国のユネスコスクールと連携して、日中韓の相互理解と和解をテーマにした国際フォーラムを開催したい
- ・ ESD に関連する特定の課題解決に向けた学校間の協働プロジェクトの実施
- ・ ユネスコ協会とユネスコスクールネットワークの協力によるジャンルを超えた共同企画を実現したい。
- ・ ネットワークを活用して学校間交流を発展させたいと考えているが、他校がなにをどのように交流したいのか、どんな交流を望んでいるのかなどの交流情報のデータベースを構築してほしい。
- ・ ユネスコスクール加盟校による、高校生によるユネスコ会議(模擬国連)のようなものを毎年実施したい。

21. ユネスコスクールネットワークを活用するにあたっての課題は何だと思いますか。

- ・ ネットワークの構築の方法を知ること
- ・ 学校間の連絡体制の工夫、マッチングサイトの充実
- ・ コーディネーターやファシリテーターの役割を担う存在が必要
- ・ 交流を行いたい、全体で共通理解しながら交流の目的を定めることが難しい。
- ・ ネットワークの活用に必要な時間や資金、堪能な人材の確保
- ・ ユネスコスクールの大きな特色は世界的な学校間ネットワークであることなので、せっかくのこの特色をより有効に生かすために、「フラッグシップ・プロジェクト」になるようなユネスコスクールの国際間交流と連携のプログラムの積極的な開発。
- ・ ユネスコスクールとユネスコ協会の連携が必要。
- ・ 海外の学校との交流には、言葉の壁があるので通訳、翻訳などのサポートが必要である。
- ・ 企業等の協力を得ることに対して少し敷居が高く感じる。ネットワークに地元の企業や市民団体がないことが課題である。
- ・ 実践例だけではなく、その結果の評価も合わせて知ることができるシステムがあるとよい。

22. ユネスコスクール公式ウェブサイトを利用していますか。

☐利用した

日本ユネスコ国内委員会

- ・ 他のユネスコスクールの取組や実践事例の参照
- ・ 職員研修のための研究会・研修会の情報収集に活用している。
- ・ ESD 教材活用ガイドの参照
- ・ セミナーや公開授業の開催状況の確認
- ・ あいち・なごや宣言やユネスコスクール岡山宣言の確認
- ・ 世界大会参加に向けての情報収集
- ・ ユネスコスクール全国大会や各地域での研修会等イベントの検索
- ・ ユネスコスクール同士の交流をする際、どのような学校があるのか調べた。
- ・ ユネスコスクール ESD アシストプロジェクト助成金申請のため
- ・ ユネスコスクールの概念、ESD の理念の確認のために利用した。
- ・ ユネスコスクール加盟校として、ロゴをダウンロードした。

☐ 利用しなかった

- ・ 具体的な活用方法が分からなかったため。
- ・ ウェブサイトを利用して、活用していくための十分な時間、人手がなかったため。
- ・ 必要性を感じなかったから。
- ・ 利用する機会がなかった。
- ・ ユネスコスクール公式ウェブサイトの存在を知らなかった。
- ・ 個人情報保護の関係から、ネットにつながるコンピューターの数が増え、その状況下で長時間かつ高頻度の使用は不可能。
- ・ 本校のパソコン環境では外部サイトを無制限に利用できないため。
- ・ ID、パスワードが分からなかったため。

ユネスコスクール公式ウェブサイトを利用していますか

